

阿波は大宜都比売命から始まる オオゲツヒメを祀る人々と阿波のまほろば

阿波の祖神大宜都比売命を祀る「阿波の総鎮守上一宮大栗神社」
大宮司 千波足尼から一宮城主一宮氏

とくしま学博士 坪内 強

<https://satoyama.yu-yake.com/index.html>

Copyright © 2025 Tsuyoshi Tsubouchi

阿波（粟国）は大宜都比売命から始まる

—— 大宜都比売命を祀る人たちと大粟文化 ——

- 施政者たちと神官の役割から読み解く、古代阿波のかたち。
- 古代阿波（粟国）は、五穀豊穡の女神・大宜都比売命（おおげつひめのみこと）を祀る人々によって、その文化と信仰を形づくられてきました。
- その営みを支えたのは、神に仕え祀る神官と、地域を治め導く施政者たち。
- 本セミナーでは、神話・祭祀・信仰の背景にある「神官」と、古代阿波の政を司る「施政者」たちの歴史を通して、大粟文化の本質を探ります。

アニミズム宗教と祭政一致

- **祭政一致**とは、 祭祀 と 政治 とが一元化、一体化していること。
- 祭政一致の祭は、「まつり」であり **宗教** を意味する。 政は「まつりごと」、**政治**を意味する。
- 祭政一致の体制の下では、**宗教的指導者**が同時に**政治的指導者**を兼ねている。
- その思想並びに政治形態は、すべての事物（動植物、無生物など）に靈魂が宿っているという思想や信仰であるアニミズム宗教で統治される古代社会に多い。
- アニミズムは汎靈説、精靈信仰、地靈信仰などといわれている
- 日本では、**巫**の告げる**神託**が政治的な権威をもった**ヤマト王権**を始めとする古代の**神権政治**に遡ることができる。
- **近代日本での祭政一致**
- 慶応4年3月13日、明治新政府は「太政官布達」で王政復古・祭政一致し**神祇官**を再興する、と述べる

祭政一致（さいせいいち）とは、祭りごと（祭祀）と政治が一つになっている状態のことです。

宗教的リーダー
（まつりを行う人）



兼ねている

同一人物が
務める

日本の例：
ヤマト王権と神託



背景の思想：アニミズム信仰

自然界のすべてのものに霊が宿ると
考える信仰



木・山・川

石・風 など

↓
霊をまつり、敬う

そのまつりの力が政治的権になる

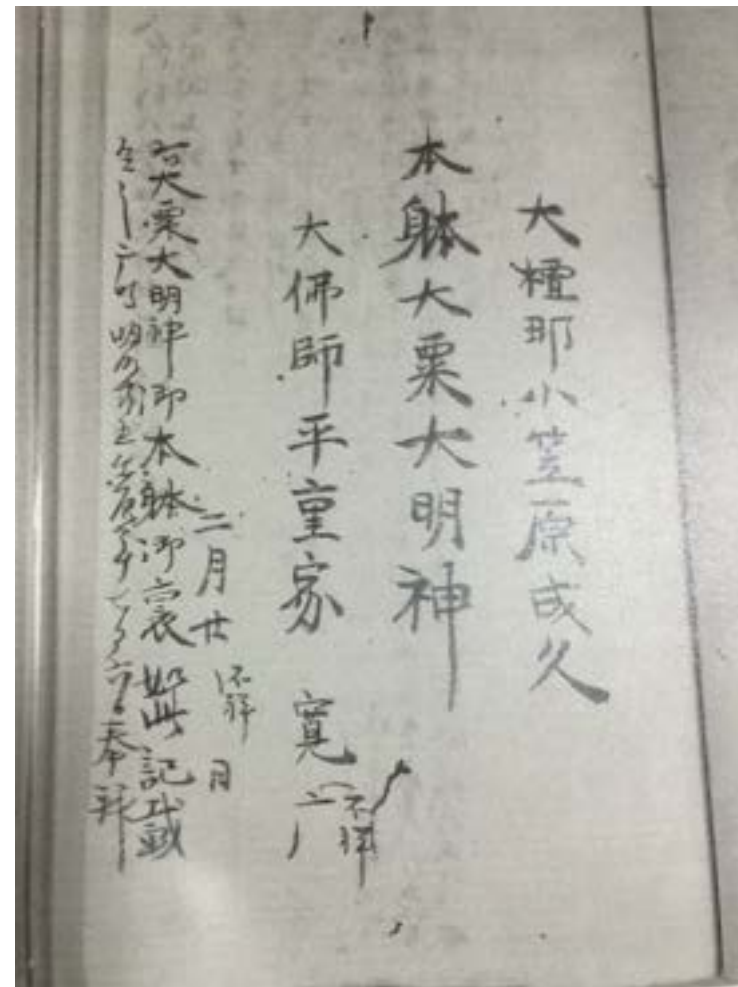
日本の例：
ヤマト王権と神託

↓
それが政治の方針になる

↓
王や支配者が「神の霊庇」を受けて支配
（神の力を借りた統治＝神託政治）



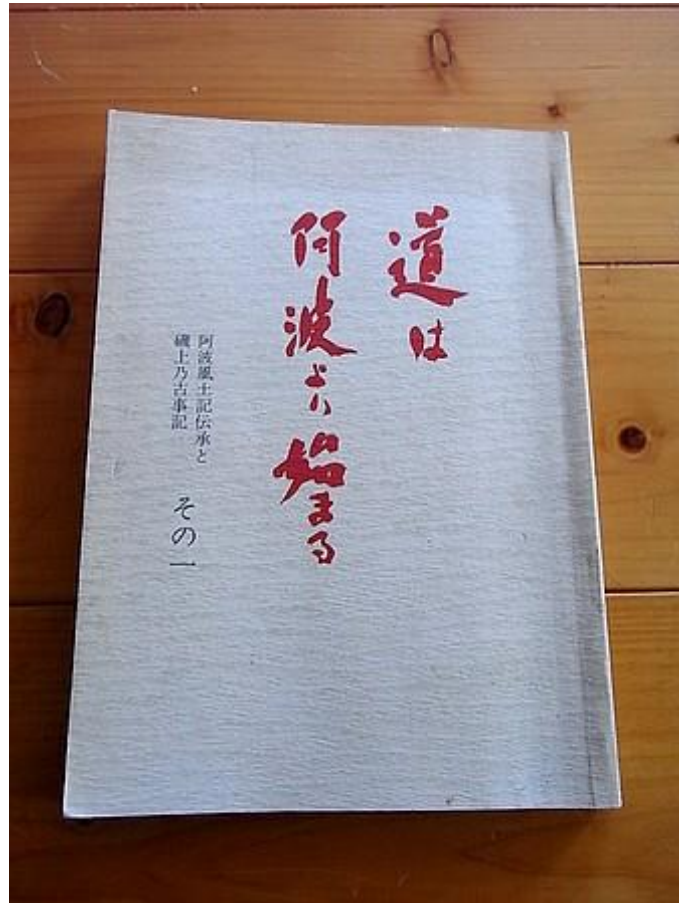
大栗大明神(大宜都比売命)神像



明治三年神社改正前まで本社に安置した御尊体は十一面観世音菩薩の木像で、裏に「本体大 栗大明神・大檀那小笠原成久・大仏師平重家」とある。

道は阿波より始まる ～阿波で千年、京で千年～

岩利大閑（いわりたいかん）（著） 販売 財団法人京屋社会福祉事業団



オオゲツヒメ神話

- オオゲツヒメ神話は**焼畑**で**陸稻栽培**をする民がもたらした。
- 縄文末期に日本に流入した、母系的・陸稻栽培＝狩猟民文化。
狩猟生活とともに山地丘陵の斜面の**焼畑**において陸稻を栽培した。
- **太陽神**アマテラスの崇拝・家族的・村落共同的シャーマニズム・司祭的**女性支配者**。
という文化をもった民である。
- アワは朝日を拝む聖地と関係し、オオゲツヒメ神話は太陽神アマテラス崇拝と共に東南アジアからやってきた。
- 「オオゲツヒメ」とは**太陽神**と**食物神**の二つの神を併せ持っている。
- アワ系の地名は沖縄の泡瀬干潟から千葉の安房国まで、黒潮の流れに沿って太平洋側に広がっている。

アワは朝日を拝む聖地と関係し、オオゲツヒメ神話は太陽神アマテラス崇拝と共に東南アジアからやってきた。



斑鳩の里の阿波神社



奈良県生駒郡斑鳩町阿波字宮の森413
主祭神 素盞鳴命(すさのうのみこと)

大宜都比売命とは

- オオゲツヒメは「大いなる食物の女神」
- 『古事記』には、五穀や養蚕の起源として何度も登場する。
- 大宜都比売神(オオゲツヒメ)は、須佐之男命に殺され、その後の人類に五穀の種子をもたらした豊穡の女神。
- 保食神、大宜都比売、大気都比売神、大宜津比売神、大気津比売神などとも記される。
- 伊邪那岐命と伊邪那美命の国産みにおいて、伊予之二名島（四国）の中の阿波国の別名として「大宜都比売」の名前が初めて表れる（『古事記』では、四国は島のみならず一身四面の神としても表現されている）。

古事記国生みにおける大宜都比売命

二神はオノゴロ島に帰り降って、天の御柱を先ほどと同じように行きめぐった。

そこで、イザナギが先に「あなにやし、えをとめを」と言い、
後からイザナミが「あなにやし、えとこを」と言った。

こう言い終えてから交わり、**淡道之穂之狭別島**あわじのほのさわけのしまを生んだ。

次に**伊予之二名島**いよのふたなのしまを生んだ。
この島は身体は一つだが**顔が四つ**あり、それぞれの顔に名前がある。
すなわち、

伊予国いよのくにを**愛比売**えひめ「麗しき女性」といい、

讃岐国さぬきのくにを**飯依比古**いいよりひこ「稲を産する男性」といい、

栗国あわのくにを**大宜都比売**おおげつひめ「穀物（粟）を産する女性」といい、

土左国とさのくにを**建依別**たけよりわけ「雄々しき男性」という。

伊予之二名島

- 伊耶那岐神・伊耶那美神が生んだ、大八島国（淡道之穂之狭別島・伊予之二名島・隠伎之三子島・筑紫島・伊岐島・津島・佐度島・大倭豊秋津島）の第二の島。



愛媛などの左半分は「予」、徳島などの右半分は「伊」

阿波は伊、イ(倭「𐤎」、壹)の国

- 古くから「予」を使っている愛媛県は、つまり「予の国」だった。
- すると、「伊予の二名島」とは、伊と予の二つの国がある島ということ。
- では「イの国」は、どこになるのだろうか。
- 伊予の二名島の西側が予の国であるなら、イの国の範囲は、おおまかにみて徳島県と香川県、高知県の東半分、つまり、四国の東半分が一つの国をなしていたと考えられる。
- 阿波は、イの国・イツの国・倭国（いつのくに）だった。
- そしてイは壹と書かれてトとも読み、阿波は邪馬壹國(やまとこく)、すなわち倭国(ワコク、ヤマト)とも呼ばれたという人もいる。
- 魏志倭人伝には、「南、邪馬壹国(邪馬臺國ではない)に至る。女王の都とする所。水行十日、陸行一月。」と書かれている。

矢野遺跡（縄文時代）

- 西日本最大級の縄文時代集落
- 現在の地表面から2～4m下層より発見された低地性の集落。平成6年～平成10年にかけて行われた道路建設に伴う発掘調査により、竪穴住居跡19棟などの遺構が検出された。
- 土器と石器に水銀朱が付いていたが、多くは朱の精製時についたものと見られており、朱の精製としては全国的に見ても古い段階のものである。
- 遺物には、土器、石器がある。土器の表面はヘラ描の区画に縄文で埋めた文様によって華麗に飾られる（磨消縄文）。
- 遺物の中で特殊なものに石棒・円柱状土製品・亀形土製品があり、特に土製仮面が注目される。顔面全体に丸い道具で突き刺した模様がある。
- 西日本でも有数の遺構と遺物に恵まれた縄文時代の集落である。

土製仮面



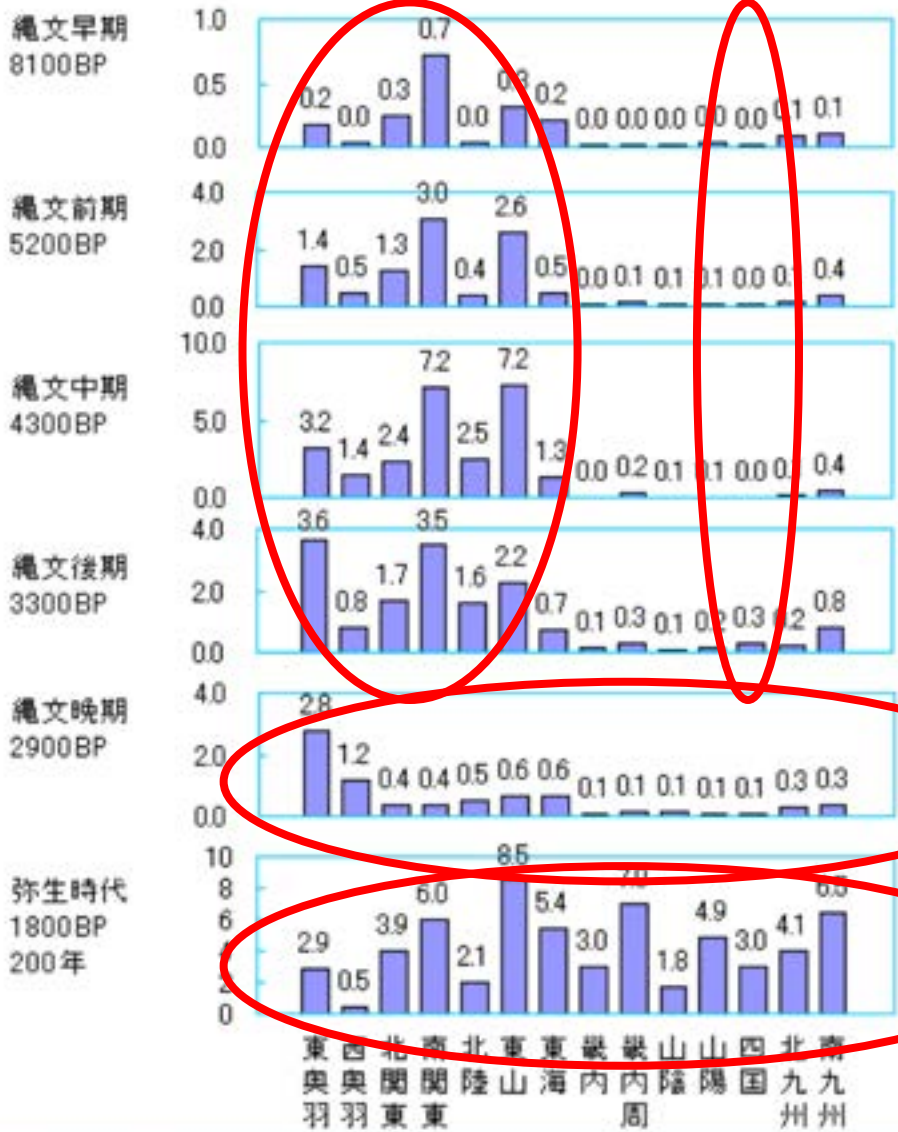
矢野遺跡の辰砂

- 辰砂の採掘は縄文時代から行われており、なかでも伊勢水銀として古くから知られている三重県勢和村丹生（にう）付近では、縄文時代後期の遺跡から、辰砂の付着した石皿、磨石や朱容器と考えられる土器が数多く出土しており、このころから辰砂の精製が行われていたことがわかる。
- 徳島市国府町の矢野遺跡においても縄文時代後期から辰砂の精製が行われていたようである。
- 弥生時代以降の辰砂の採掘では徳島県阿南市の若杉山遺跡が有名で、弥生時代終末期～古墳時代初頭の一大産地であったと思われる。
- また最近では縄文から弥生、古墳時代の遺跡が発見された加茂谷遺跡も注目されている。
- それでは、縄文時代に辰砂は何処で採掘されていたのだろうか？
- それは神山から入田の辺り、つまり大栗山地区だったとも言われている。

縄文・弥生時代の人口

地域別人口の超長期推移

単位: 万人



縄文時代の人口は、ピークで26万人位で、
関東・東北に人口が集中していた。

四国は千人位しか住んでいなかった。

縄文晩期には全国の人口は急減し3万人位に減少した。

これは寒冷化や鬼界アカホヤ火山の噴火に依るものとされる。

所が弥生時代には急激に増えて全国で59万人位に増加した。

その中でも四国は3万人と畿内や九州、山陽と共に急増した。

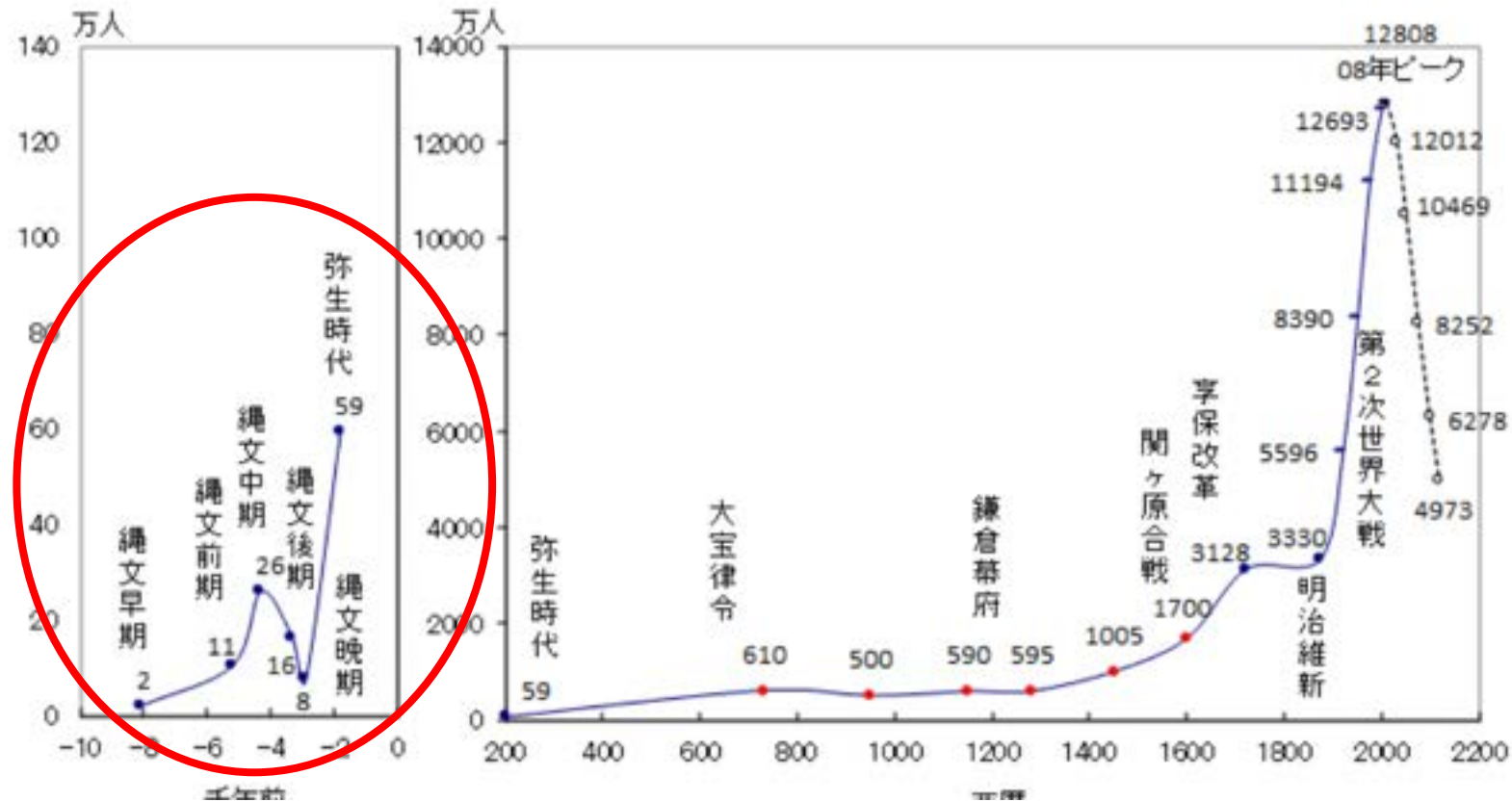
矢野遺跡には100軒程の竪穴式住居後が発見されている。

これは渡来人が多く移住したことを示すのだろうか。

しかし、渡来人ゲノム比率から見ると違った側面が見える。

人口の推移

人口の超長期推移



弥生時代は人口が59万人。
これが奈良時代(8世紀)までに10倍以上の600
万人から700万人位に増加する。

鬼界カルデラ火山噴火

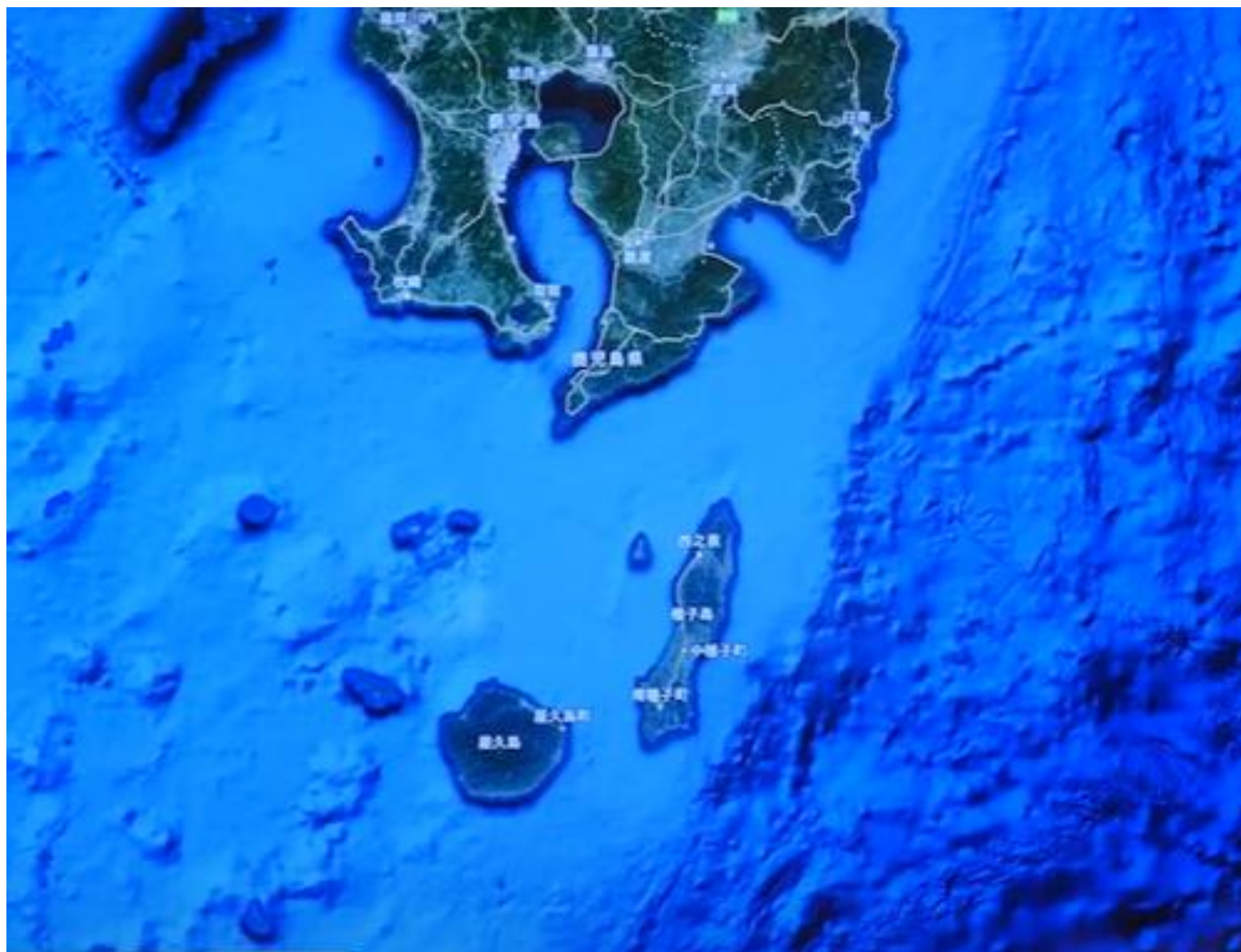


九州南方沖の海底火山、鬼界カルデラが起こした7300年前の「アカホヤ噴火」は、過去1万年の内では世界最大規模であった。

火山灰（アカホヤ）は東北地方まで降り注いだ。大規模な火砕流は推定時速300キロという高速で海を渡り、大隅半島や薩摩半島に上陸。九州南部の縄文文化を壊滅させたとされる。

九州南部は1000年近く無人の地となるなど、南九州を始めとする四国や山陰、山陽地域の縄文人に壊滅的な被害を与えた。四国でも20%もの火山灰が積もったと言われる。

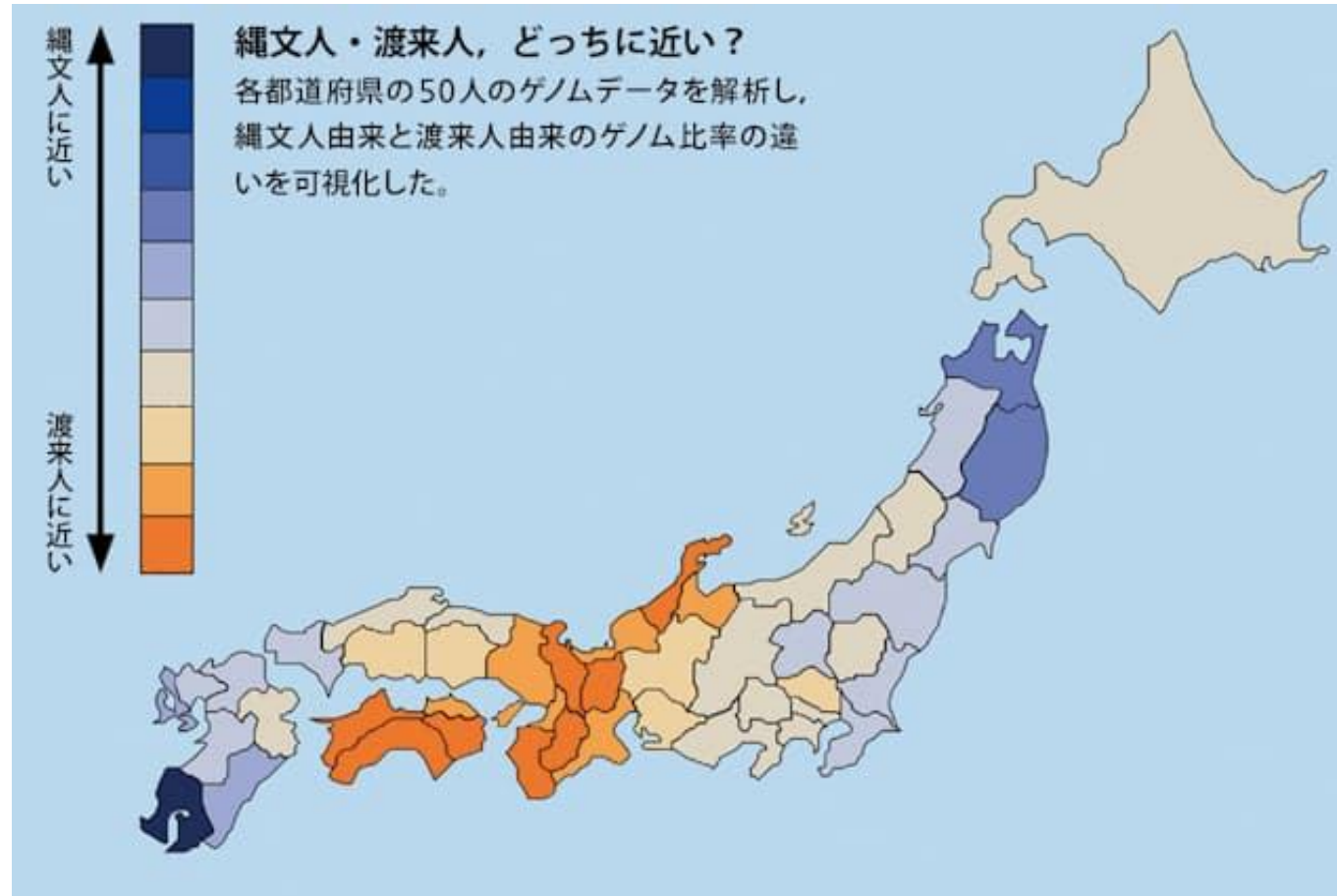
積もった火山灰から逃れて、生き残った人々は、火山灰の無い地域へ移り住み絶滅を免れた。



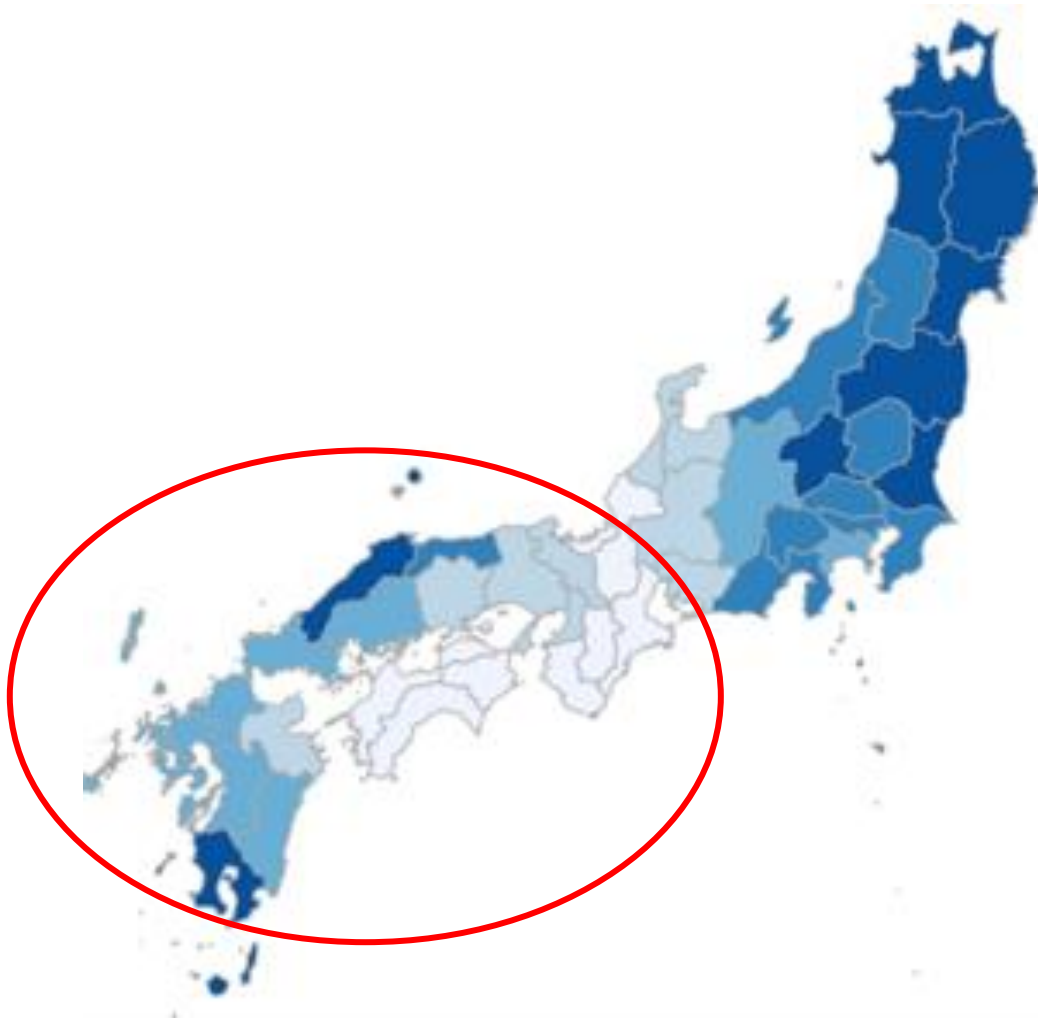
渡来人ゲノム比率

- 各都道府県の50人のゲノム情報をもとに、その違いを可視化した。
- 縄文人由来のゲノム成分が多い県は青色で、渡来人由来のゲノム成分が多い府県はオレンジ色で表示されている。
- 沖縄県の次に縄文人由来のゲノム成分が高かったのは九州や東北だ。
- 一方、渡来人由来のゲノム成分が高かったのは近畿と北陸、四国だった
- 特に四国は島全体で渡来人由来の比率が高い。

渡来人ゲノム比率分布図

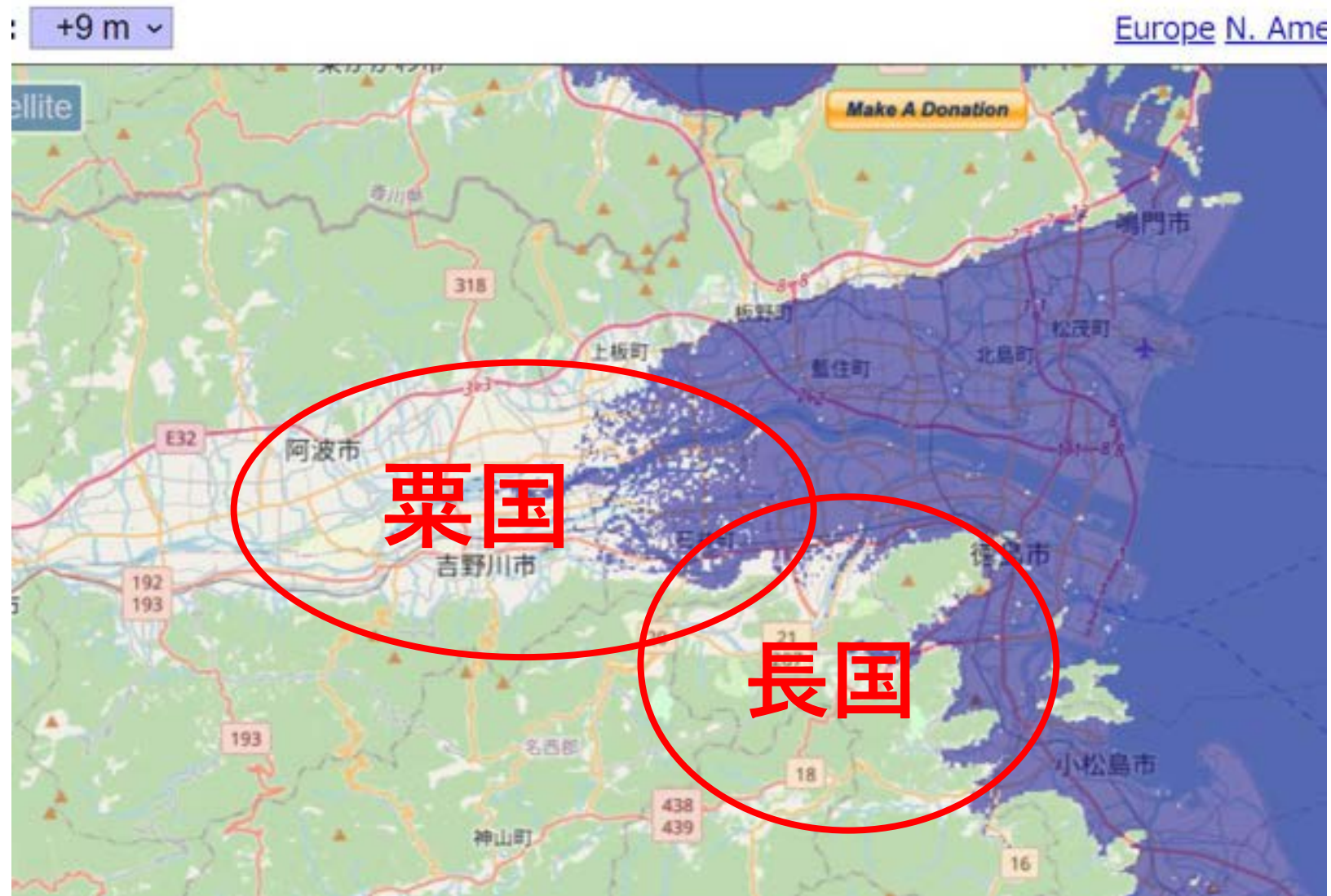


縄文人由来変移



10,000人の全ゲノムSNPの遺伝子型データ
縄文人由来ゲノムが、近畿、四国が少なく九州南部と島根県が特に多い。

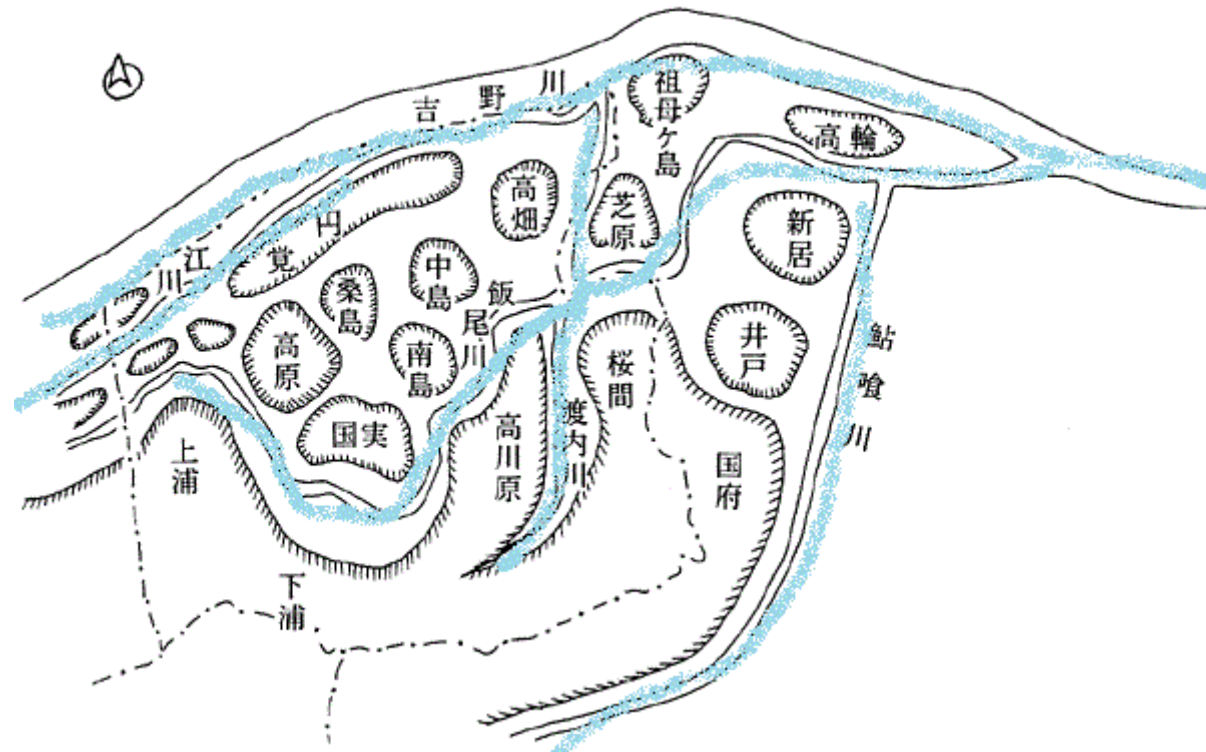
縄文海進時の海



古代の石井・国府地区

古代の石井・国府地区では飯尾川と鮎喰川の流水地帯の微高地や気延山麓の低丘陵に住んでいたと思われる。

古代地形想定図



- 神山町に於ては、弥生式時代の銅剣が5本も出土しているのに古墳時代、奈良、平安時代の資料が皆無と言ってよいほど少ない。
- ただ1つ下分上山で内黒の腕形土器が出土している。これは弥生時代後期から古墳時代に続く時期のもので、初期の埴師器(はじき)ではないかと考えている。
- 中世時代に入ると古文書、板碑などだんぜん資料が多く見受けられる。
- 四国三郎と呼ばれる吉野川の第一支流である鮎喰川は、神山の奥に源を発して吉野川とやや平行に北東に向って流れ下り、徳島市の北西で本流の吉野川に流れ込み、紀伊水道にそそいでいる。
- 吉野川と鮎喰川の三角州の沖積層には阿波国の上代文化の中心地であり、阿波国の国府司庁、阿波国分寺、国分尼寺などの国家施設が設置され、これらの場所はいずれも鮎喰川流域沿いに建設されている。

弥生時代から古墳時代へ

- 当時の人々は食糧として稲作の他に丘陵地や山間部では縄文時代からつづく焼畑農業(粟作)を行っていた。
- 稲作を生産の主体としない社会では、共同作業の必要も少なく、権益の争奪もなく、階級制度が成立するのも遅かった。それが鮎喰川上流(神山町)に古墳を多く見ない原因だろう。
- 国府町や石井町の文化は稲作文化圏である。
- したがって古墳を築造する文化である。
- 石井町の古墳は主として町の東半部に片寄り、気延山を中心として展開している。
- これは明らかに麻植文化圏ではなく、気延山を軸として石井・国府にひろがる穀倉地帯を掌握する気延山文化圏があったと考えられる。

大栗の郷栗生 (あわふ)の里

- 神山町はこの鮎喰川流域に点在する集落によって形成されている集落である。
- 鮎喰川流域のほぼ中央にあたる神領上角には、阿波国の祖神である大宜都比売神を祭神とする上一宮大栗神社が鎮座する。
- 徳島市入田町以西、名西山分(入田村・阿野村・鬼籠野村・神領村・下分上山村・上分上山村)の土地は古くは名方郡に属し、埴土郷（はにごう）であり、名東郡は殖栗郷（恵久利）であり、内谷、矢野、一宮、佐那河内がこれにあたる。
- 後世には以西郡として一郡を作っている。
- この大栗の郷は「阿波国徴古雑抄」所載の長講堂文書によると、元享3年（1323）3月23日長講堂領阿波国一宮大栗～とあり、埴土郷は莊園として一宮大栗と称され、長講堂となって持明院統が伝領せられた。
- その後一宮成宗が一宮大栗の地領となり、徳島市一宮に城を築いてより、名西山分を単に大栗山と称したのだろう。

イザナミの神産みにおける大宜都比売命

- 多くの神の生まれた最後に、人類の英知へとつながる神々が3柱誕生する。
- 最初に登場するのは、鳥之石楠船神（トリノイハクスブネ）という、別名、天鳥船（アメノトリフネ）とされ『神が乗る舟の名』を司る神である。
- そして、次に生まれた大宜都比売神（オオゲツヒメ）は、五穀登場の話にも登場する『穀物』の神。
- 最後に、『火』を司る神、火之迦具土神（ヒノカグツチ）を迎える。
- ある意味、この最後に登場する「船」「稲」「火」という組み合わせは、人類の発展を劇的に変化させたものとして非常に重要なことを伝えている。

イザナギの禊で生まれた天照三姉弟

- 最後に、古事記の神話の主役となる神々が現れる。それが、いわゆる三貴神と呼ばれる神々である。
- イザナギの左目から皇祖神である天照大神（アマテラス）
- 右目から月読命（ツクヨミ）
- そして、最後、鼻から建速須佐之男命（タケハヤスサノヲ）こと、素戔男尊（スサノヲ）
の3柱の神々が誕生した。

須佐之男命と大宜都比売命

- 高天原を追放された須佐之男命は、空腹を覚えて大氣都比売神に食物を求め、大氣都比売神はおもむろに様々な食物を須佐之男命に与えた。
- それを不審に思った須佐之男命が食事の用意をする大氣都比売神の様子を覗いてみると、大氣都比売神は鼻や口、尻から食材を取り出し、それを調理していた。
- 須佐之男命は、そんな汚い物を食べさせていたのかと怒り、大氣都比売神を殺してしまった。
- すると、大氣都比売神の頭から蚕が生まれ、目から稲が生まれ、耳から粟が生まれ、鼻から小豆が生まれ、陰部から麦が生まれ、尻から大豆が生まれ、大地に五穀豊穡をもたらした。

自然の循環を司る大宜都比売神

- これはそのまま**大自然**の営(いとな)みを表す。
- 植物が枯れ果てる**冬**は、全てが死に絶えた世界であるかのように見える。
- しかし生命は、荒涼とした大地のなかで息づいており、厳しい冬ののちには必ず**春**が訪れ、**夏**を経て、**秋**にはまた豊かな実りに恵まれる。
- **大宜都比売神**も、**破壊**と**再生**という大自然の循環をつかさどる女神だと考えられる。
- 同じように食物を司る**トヨウケヒメ**(豊宇気比売神)や**ウカノミタマ**(宇迦之御魂神)も同神であると言われている。
- この話は、**死**と**再生**の神話型類型を示している。女神は大地を象徴し、殺されるというその死の過程を経て、農作物の豊かな実りに寄与する

上一宮大栗神社は天石門別八倉比賣神社の論社

- 上一宮大栗神社の「**社伝**」によれば、**大宜都比売神**が**伊勢国丹生**の郷から**馬**に乗って阿波国(神山丹生山の馬が原)に来て、この地に**栗**を広めたという。
- 『**延喜式神名帳**』に記載される名神大社「**阿波國名方郡 天石門別八倉比賣神社**」の**論社**の一つで、天石門別八倉比賣神社は神亀5年（728年）に聖武天皇の勅願所となり、元暦2年（1185年）には正一位の神階を授ける。
- **平安時代?**には、現在の一宮町に**当社の分祠**として**一宮神社**が創建された。
- 明治3年、明治政府により、社名を「**埴生女屋神社**」と改められた。(大宜都比売命が伊勢の丹生から水銀朱を持ってきたことに由来か?)
- しかし、氏子の請願により、25年後の明治28年（1895年）に現在の**上一宮大栗神社**となる。

- 大宜都比売命が粟を持ってこの地に来たのは縄文時代後期くらいのことだろうか。
- それともずっと下って律令時代以降のことだろうか？

大宜都比売命がやってきた伊勢の丹生

- 三重県多気郡多気町丹生に式内社 丹生神社ある。御祭神は埴山姫命。
- 由来は、聖武天皇が東大寺大仏殿の建立の際、水銀の産出をこの地の神に祈ると忽ち水銀が湧出したので、丹生明神と名づけた。
- また、嵯峨天皇が降雨を祈ったら霧雨があり、晴れを祈ったら、晴れたという故事により、丹生大明神は祈雨、祈晴の神ともいう。
- 大宜都比売命がなぜ伊勢から粟を持ってきたのかは謎である。水銀朱を持ってきたのならわかるが？
- もしかしたら、オオゲツヒメは水銀朱と深い関係があるのかも。
- 明治になって、オオゲツヒメがやって来た伊勢国丹生神社の御祭神が埴山姫命であることから埴生女屋神社に無理やり代えられそうになった。
- 埴生女屋と埴山姫命そして埴安姫は同一神。

大宜都比売命と埴生^{はにゅう}姫

- **埴生** 此の県は入田より上山村迄山分の地なり、神は**埴生姫**の命なり。「阿波国古代郡県及国司沿革抄」
- 大化の改新に何故此の地を埴土郷と命名したかについて、「阿波志には所謂**埴生郷**といひ、其の東南の地を**丹生内**といふ、阿波国都村誌にはこの地の神は大栗山で、**伊勢の国丹生**より乗馬にてお越しなりしといふ。「神領村史」
- この伝承からは、**伊勢の丹生氏族**のこの地への**移民**が想定される。
- その**丹の技術**によって、縄文時代**矢野村**に**水銀朱の精製所**が築かれたのか。
- 鮎喰川流域には、水銀朱の鉱床があったと言われ、**入田**は**丹生田**で、建治滝の紅簾片岩の大岩付近は鉱山跡であり金治川が流れている。上分の金泉付近も怪しい(丹生山、仁生田(にうた)神社がある)。
- 其の地への、**埴生姫**、**丹生都比売神**^{にうつひめ}の移入、そして此の神と「大宜都比売神」の合祀そして、更に進んで八倉比売神にまで変わっていったのだろうか。
- 神代から粟の神様オオゲツヒメが治めていたの伝承と伊勢国から来たという伝承が違和感無しで伝えられているのは何故だろうか。。

「丹生内有石、形似臥馬、名馬石」 （阿波志）

- 丹生ヶ山の御馬原(大宜都比売命が最初に降臨した場所)
- 大宜都比売命が乗ってきた馬が石となったと伝えられている。



埴生^{はにゅう}姫と大宜都比売命

- 縄文時代には水銀精製に関わる、ある程度の技術者集団が鮎喰川流域には生まれていた。
- 縄文の水銀集団は、弥生時代になって大陸から渡ってきたより高度な知識と技術をもつ渡来人集団に吸収されていった。
- 縄文時代から水銀朱の神として信仰されていた神は、縄文祭祀を受け継いだ信仰の神であり、縄文の赤(水銀朱)の神であった。
- その後、伊勢の丹生からきた**水銀朱技術者集団**の祀る埴生姫、丹生都比売は、地元祀られていた八倉比売神、大宜都比売命と融合し顔を変えて現在に至っているのかもしれない。
- 大宜都比売命は水銀が出なくなった後は、地下から湧き出る水の神や龍神、山の神に変化し、やがて水を重要とする稲作の発展に伴って農業の神へと変わっていったとも考えられる。

栗国造である千波足尼

- 旧事記によると、上一宮大栗神社の古代祭官は応神天皇の御代に千波足尼（ちはのすくね）が国造を拝命し以後三十四世にわたって祭事を司ったとある。
- 国造本紀に云う栗国造とは、軽島豊明の帝〔応神天皇〕の御世に高皇産靈尊（たかみむすびのかみ）の九世の孫の千波足尼を国造に定められたとある。
- 応神天皇と言えば実在したとされる最古の天皇とされ、この神社はその時代にはあったと言うことになる。
- しかし社殿は、町の調査では承久3年(1221) 阿波守護小笠原氏の縁で創建されたとある。
- 栗国造であったという千波足尼は本当に存在したのだろうか。

上一宮大栗神社



上一宮大栗神社

- 神領字西上角330 承久 3 年(1221) 旧郷社
- 『延喜式神名帳』に記載される式内大社「阿波国名方郡 天石門別八倉比賣神社」の論社の一つ。
- 天石門別八倉比賣神社は神亀5年（728年）に聖武天皇の勅願所となり、元暦2年（1185年）には正一位の神階を授けられた。
- 平安時代!?!には、現在の一宮町の明神丸に当社の分祠として一宮神社が創建された。
- 「明神丸 堅十八間横九間一宮明神社地跡」と記録が残っている。
- 主祭神
- 大宜都比売命 - またの名を天石門別八倉比売命あるいは大栗比売命とされる。
- 社伝によれば、大宜都比売神が伊勢国丹生の郷（現 三重県多気郡多気町丹生）から馬に乗って阿波国に来て、この地に栗を広めたという。

上一宮大栗神社縁起

御祭神 **大宜都比売命** 又の御名 **天石門別八倉比売命** **大栗比売命**

一、古事記によると**大宜都比売命**は**栗国**（阿波）を開かれた**祖神**で、**五穀 養蚕**の神として古代から農耕を守り生命の糧を恵み続けられています。

一、神亀五年（**728**）聖武天皇御勅願所となり 元暦二年（**1185**）御祭神に位階正一位を給い 以来**正一宮大明神**として広く崇敬されてきました。

一、旧事記によると当社の古代祭官は応神天皇の御代に**千波足尼**（ちはのすくね）が**国造**を拝命し以後三十四世にわたって祭事を司りましたが、時の祭官**一宮宗成**に代って暦応四年（**1341**）阿波守護の**小笠原長宗**が祭官となり、後に一宮大宮司となり、その子**成宗**の代に一宮町に当社の分霊を勧請して**一宮神社**を創建しました。

一、今に残る江戸時代の十四枚の棟札（最古寛文十三年）からも社名が、**一宮明神**、**田ノ口大明神**、**大栗上一宮大明神**、**上一宮大明神**などと変った事がわかります。

明治三年（**1870**）**埴生女屋神社**と改められたが、明治二十八年（**1895**）氏子の請願によって現在の**上一宮大栗神社**に確定されました。

撰 宮司 阿部千二 氏子会 大栗山保勝会

神領村誌大正四年（1910年）

「我が神領村神代の昔より早く開けて已に民の居住せし者の如し即ち神代の時大宜都比売命（田口神或は大栗比売命又天石門別矢倉比売命とも云ふ）本村大栗山付近に始めて粟を播き民に耕耘の道を教へ給ひし地方にして大栗谷又は粟生あおうと称す粟の国の本源地にして国号の起りし原地なりと傳ふ」



大宜都比売尊の依代と大栗山天辺丸

古代の神社信仰と社殿

- 昔は社殿がなく、大自然に神がいると信じていた。
- 山や川、木など身近な自然を神としてあがめていたのだった。
- 神社の始まりは、神が宿る「依り代（よりしろ）」や自然そのものを神体とする「神奈備（かんなび）」であった。
- 神奈備は神が住む山や森、岩や滝などの場所を指す。
- 山岳信仰の影響で山自体が神とされ、入ってはいけない禁足地や神体山と呼ばれた。
- 時代が進むと、神奈備の場所に社殿が建てられ、神社の境内がはっきり区別されるようになった。
- 立派な社殿が建てられるようになったのは仏教が伝わってからである。

大栗神社と神官

- 大栗郷に鎮座する阿波最古の神，**大宜都比売神**は，古伝説では阿波国を開き，粟を植えて農耕の法を教えられた。
- この神を**祖神**と**崇める一団**の人々が鮎喰川を遡って定住し，**大栗文化圏**を作ったと考えられる。
- その部族の祖神である大宜都比売神の**宮司**になることは，すなわちこの地域を**統治**する資格者である。
- それ故に阿波国の武士団の頭梁や豪族の長などは**この神社の宮司**になることを競いあった。
- これらはこの神の鎮座する**神領盆地**（鬼籠野，下分上山をふくむ）という農業地帯，すなわち有力な経済基盤があったからだろうと言われる。

上一宮大栗神社と阿波一宮

- 旧郷社。地元では大阿波（大栗）さんと通称される。
- 祭神は大宜都比売命。大宜都比売は焼畑の穀霊とされ、
- 阿波（栗）国の祖神ともいわれる。
- 大同三年（808）に阿波国司となった田口息継の一族が祖神として崇敬し、田口大明神とも称されるようになった。
- 田口氏はのち一宮氏を称したとされる。
- 阿波国一宮については現鳴門市の大麻比古神社とする説があるが、当初の一宮は上一宮大栗神社で、のち当社から分祀されたといわれる現徳島市の一宮神社に移った。
- 南北朝期に守護細川氏の影響下において大麻比古神社が一宮となったと言われている。

上一宮大栗神社由緒

通称「大阿波さん」。祭神大宜都比売神は伊邪那岐、伊邪那美二神の子で五穀を司どる神。栗国（阿波）を別名大宜都比売と言う。

この神が、伊勢国丹生の郷より神馬に乗り八柱の供神を率いて阿波国に移られ国土を経営し、粟を蒔き、この地一帯にひろめられたという。又の名を**大栗比売神**あるいは**八倉比売命**と申しあげる。大栗山は名西山分の諸山を総称して言い、その各村を大栗谷、栗郷とも言う。既ち一国開闢の祖神の本拠地にして、大宜都比売命は**粟の凡直**の遠祖であり、その神裔が世襲で祭祀せしが、のち小笠原氏が一宮大宮司として奉仕した。

一宮と言うのは祭神が栗国の開祖で格式高い社だからとか、式神名帳にのせられている名方郡でただ一つの大社（八倉比売神社）だからとも言われる。

承久3年（1221）阿波の守護に任ぜられた小笠原長清の子孫長宗が名西郡上山に攻め入り代々奉仕してきた栗飯原家を滅ぼして大宮司と称し、姓を一宮と改めた。その子孫が相次いで一宮大宮司と称し、武将と祭官を兼ねていたが、その後当社の分霊を一宮城内に祀ったのが下一宮であり、一宮成行の代になり城主と祭官を分け、下一宮を城主領として長男の成良に、上一宮は神領分として次男成直にこれを祭らせた。のち一宮の呼称が下に移ったのは一宮氏の居城と神社が同所にあったから一般化したのであろう。

藩政時代蜂須賀氏は、代々藩主祭資を納め神馬を寄進する等崇敬厚かった。明治3年神社改正の際社号を埴土女屋神社と称したが同28年現社号に定められ郷社に昇格した。なお社号は一宮明神、田ノ口大明神（、上一宮大明神、大栗上一宮大明神などがある。

- 大粟神社の神話では、
 - 伊勢国から八神を率いて女神様が粟に降臨した。
 - 八神とは、神話や神領村誌によると以下の神々になる。
- ・ 腰宮 葛倉神社（こしのみや くずくらじんじゃ）
 - ・ 須佐宮 八坂神社（すさのみや やさかじんじゃ）
 - ・ 刻宮 津々姫神社（ときのみや つつひめじんじゃ）
 - ・ 斎宮 倭姫神社【白桃妙見神社とも】（いつきのみや やまとひめじんじゃ）
 - ・ 星宮 妙見神社（ほしのみや みょうけんじんじゃ）
 - ・ 開宮 皇道神社（ひらくのみや こうどうじんじゃ）
 - ・ 治宮 皇子神社（しらすのみや おうじじんじゃ）
 - ・ 穂宮 葦稻葉神社【若宮神社とも】（ほのみや あしいなばじんじゃ）

上一宮大栗神社と上角八幡神社

- 大栗神社には八神を超越する別宮と呼べるお宮がある。
- **阿閑宮**【あべのみや】 **上角八幡神社**(うえつのはちまんじんじゃ)
- 八神を率いて降臨した大宜都比売命を迎えた**太古の栗の王子**。
- **阿閑宮の神**は、彦火火出見神(ひこほほでみのみこと)。**山幸彦**。
- 大和の神話では**神武天皇の祖父**にあたり、さらには**豊玉姫神**と結ばれるため、**海洋民族**との関わりを示唆する神である。
- 神話では、山の仕事をしていた、とされる。
- **大栗山**とは実は山の所領全体をさす中世の用語であり、いまの一宮神社あたりが田之口(入田)であり大栗山の入口で、大栗山(神山)は、古代は海上交通が盛んな地域と考えられる。
- **栗の太古の神**は、**大栗山自体**であった。

- 上一宮大栗神社の近所に、**上角^{うえつ}八幡宮**があり、祭りの日には、上一宮大栗神社から空の御神輿が八幡宮までお迎えに行き、八幡宮からの御神体が大栗神社の神輿に乗せられ、大栗神社まで戻って来る。
- そして、八幡宮の御祭神の御神体が、大栗神社の本殿の中に入り、一泊して大宜都比売命と**神議り**をする。



上一宮神社宮司 安倍氏

- **阿部氏**は大栗姫尊（大宜都比売命）が八柱の随神を連れ、**丹生ヶ山の御馬原**に降臨してからの**側近中の側近**であり、現在でいう**執事**の役割を担っていた。
- 本来、大栗山周辺で**仙事**に携わっていた**阿部氏**は、大栗姫尊が降臨した際に山中で居合わせた際に**姫たちに食べ物**を提供し、そのまま大栗姫尊に仕えたと伝えられている。
- 現在でも、子孫が**上一宮大栗神社**の**宮司**を務めており、長宗我部により一宮氏が滅び、木屋平氏が神領に攻め込んできた時、神宮寺に逃れたとの記録がある。
- しかし、栗飯原家にも似たような伝承がある。
- 栗飯原家系圖に曰く 大宜都比売命に栗飯を炊き神供と爲せしより栗飯原の氏を冒せり

栗飯原家

- 「栗飯原家略伝」では、**栗飯原家**の遠祖は**栗国造**であった**栗凡直**であると記されている。
- 「**栗飯原家略伝**」
- **栗飯原**ハ本姓**栗凡直**姓ニシテ即**栗国造**家ナリ **遠ツ祖**ハ言卷モ尊キヤ栗国魂**大宜都比売命**ト申テ国開闢之大神ニオハシ坐テ所謂名方郡天石門別八倉比賣神社大月次新嘗ノ御神ニ坐ス也
- 元暦二年三月三日神階ヲ極タマイテ**正一宮大明神**ト申ス 是**栗国造栗凡直 栗宿祢**等之遠祖 板野阿波名東名西等四郡之氏神也 故ニ當国ノ一宮尊ミ敬ヒ奉リテ今名**西郡神領村**大栗山ニ鎮坐ス一宮大神是也在
- 昔ハ**神録**ヲ一宮領ト唱ヘ地名ヲ上一宮下一宮ト唱ヘ又御社ヨリ上ヲ上山ト云下ヲ下山ト云 則**上一宮**ノ地ハ近昔マテ神録ニ残リテ有シユエ**神領分**ト云フ 後ニ**神領村**ト改ム亦**下一宮**ハ今ノ一宮村也 其地ニ在ル御社ハ分祭也
- しかし、細川氏の阿波入部に軍監として随従して阿波国へ入った栗飯原氏が祖先とも言われている。

天岩戸別八倉比売神社

- **八倉比売神社**は、気延山の東麓、吉野川の支流である鮎喰川の下流左岸にある**杉尾山**（標高120m）の山頂付近に鎮座している
- 社周辺は「阿波史跡公園」となっており、園内には**三角縁神獣鏡**が発見された**宮谷古墳**や八倉比売神社1号・2号墳、奥谷古墳、矢野古墳など、**約200基**が点在し、県下最大の**古墳群**を形成している。
- **八倉比売神社**は名方郡**大社天石門別八倉比売神社**の有力な**論社**の一つである。
- 江戸時代には阿波国を治めた**蜂須賀氏**が当社を崇敬し、寛保年間（1741～ 43）に正一位**杉尾大明神**と称した。
- 明治3年（1870）に現社名に改称、同5年（1872）県社に列格した。
- 現社殿は、江戸期に矢野出身の藍商、盛六郎右衛門が寄進した。

天石門別八倉比売神社の由緒

- 由緒書きには、当社ははじめ**気延山**の山頂に祀られていたが、推古元年（593）に現在地に遷座し、江戸時代に奥の院を拝するための拝殿と本殿を造営して現在に至るとある。
- **社殿**と**奥の院**は**前方後円墳**の上に建てられた神社と考えられている。
- **社殿**は古墳の前方部に建立されており、後円部に**奥の院**として**五角形**の石積みの祭壇が築かれている。
- 神社略記には、祭壇上にある「青石の祠に、砂岩の鶴石亀石を組み合わせた「**つるぎ石**」が立ち、**永遠の生命**を象徴する。」と記されている。
- 一説によると、これが「**卑弥呼の墓**」だといわれている。
- しかし、**八倉比売古墳群**の築造年代は**4世紀後半**より遡ることはないと言われている。
- 卑弥呼没年の247年、あるいは248年から、少なくとも100年以上の隔たりがある。

気延山山頂



気延山山頂には、森本院の奥宮と役行者が祀られている。

天石門別八倉比売神社



八倉比売古墳と五角形の祭壇



天石門別八倉比売神社石段の石灯籠

石段途中には、盛六郎右衛門が寄進した石灯籠が幾つか残っている。

「八倉姫神社」 安永3年(西暦1774年)との年号が刻まれており、その頃には八倉姫神社と呼ばれていたことがわかる。



徳島県下の杉尾神社

- 杉尾神社は徳島県下に20社以上ある。
- ご祭神が天石門別八倉比売命とされるのは、板野郡藍住町笠木に建つ杉尾神社。
- 阿波史には、古くは「杉尾大明神」と呼ばれて村民から崇拝されていたと記されている。
- 室町時代には笠木城主から崇敬を受け、江戸時代に入ると徳島藩主の蜂須賀家政にも厚く敬拝され、家政は家紋入りの高張ちょうちんを奉納している。
- なんで藍住に天石門別八倉比売命？

伊賀の延喜式 阿波神社

【延喜式神名帳】 阿波神社 伊賀国 山田郡鎮座

【現社名】 **阿波神社**

【住所】 三重県伊賀市下阿波字宮谷 879

北緯34度45分15秒，東経136度15分58秒

【祭神】 稚日女神 猿田毘古命 火産靈命

【例祭】 4月25日 例大祭

【社格】 旧郷社

【由緒】 貞觀15年(873)9月27日從五位上

中世に**阿波越後**が**阿波國**から**杉尾白鬚神**を遷迎合祀した

明治4年7月村社

同15年5月郷社

【関係氏族】 **阿波君** 息長田別王

【祭祀対象】 氏祖

【祭祀】 江戸時代は「**杉尾大明神**」と称していた



阿波越後館跡

一宮神社の成立

- 各国の**一宮**とは、その国の**総鎮守**というべき性格を持ち合わせて居る。
- 一宮神社の社格制度は、**平安時代**の後期に成立した。
- 当時は、律令制に基づく神祇官制度（じんぎかんせいど）が、既に確立されていた時代となる。
- **神祇官**とは、祭祀を司る神職を意味し、現代社会では、政教分離の観点からも、こうした神職者が政治的機能に含まれていないが、元は、国家祭祀は、重要な国事と位置づけられていたので、**公職者**と**神職者**を両立することは不思議なことではなかった。
- 実際、その立場は、行政を司る太政官よりも上位に置かれたとも。
- 天皇(中央政府)より各国に派遣された行政官(国司)が、まず一番に参拝をしたといわれる。

一宮神社が式内社天石門別八倉比売神社神社？

- 一宮神社が天石門別八倉比売神社であるということについては、延享4年の『一宮大明神輿勧進帖序』に「名東郡一ノ宮村に在す御神ハ天岩門別八倉比売命と申伝たり」とある。
- しかし江戸時代半ばになると、『矢野神山八倉比売神社本紀』に基づき徳島藩の藩撰地誌である『阿波志』などが矢野村の杉尾大明神（天石門別八倉比売神社）を当て、神領村の大栗大明神（上一宮大栗神社）は埴生女屋神とした。
- これに従って徳島藩は矢野村の杉尾大明神を式内社と定め、明治3年に杉尾大明神を天石門別八倉比売神社、大栗大明神を埴生女屋神社と改称した。
- しかし、明治に入ると『神祇志料』は天石門別八倉比売神社は名東郡一宮村の一宮明神とし、『特選神名牒』も『矢野神山八倉比売神社本紀』は後世の作で証拠にはならないとして一宮神社に比定している。

矢野神山八倉比売神社本紀

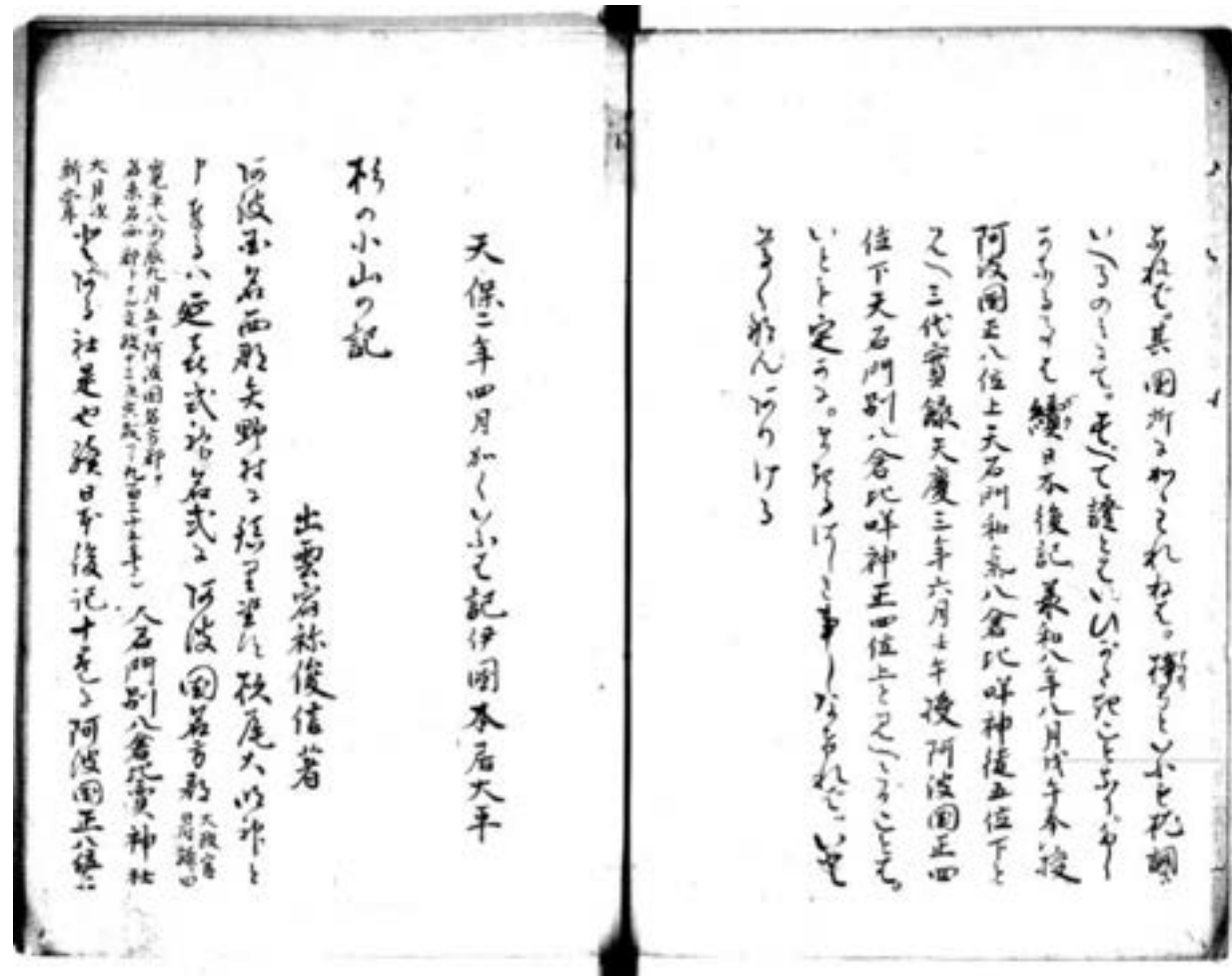
- 【天石門別八倉比賣大神御本記】 古天地初發之時 於高天原成神名号天之御中主神止 次國雅如浮脂多陀用弊琉之時狀如抽葦牙物化為神号國常立尊止 而後在神伊邪那岐神 次妹伊邪那美神 此二神國土海原及山川諸乃靈神產生之後 伊邪那岐神洗左御目時所成神名号日?大神是則八倉乃日?大神也 最初高天原爾志氏武備志賜比志後 天石門別乃神爾勅天自今以後汝等吾爾代天武備乎奉負 亦曰此羽々矢此御弓於波葦原中國仁持降天可善地爾奉藏永爾莫用矣 吾亦天降天其地可佳止宣氏天羽々矢乃天乃麻迦胡弓止於賜只 故二神高天原與利此弓矢於持下利賜布示時二神天乃中空爾立志氏此矢乃止所以奉藏止盟給天彥所乃矢則止流地 号矢達之丘（今謂矢陀羅尾）故二神此地爾矢於覺來利天周久覺給志加波其地於号矢乃野 其矢求出低永奉藏地乎波号矢乃御倉 其弓於奉藏之地乎波弓乃御倉止謂只 而後二神此地爾留坐天（松熊二前之神是也）御矢倉乃御弓於守利給?在年 而後比賣大神天八重雲於伊津乃路別爾千別天天降給只最初梶乃小川乃清只流乎照臨賜天此川乃水深志止謂登毛太早止宣喜故其所乎謂早渚乃邑止 于時大地主神（土宮是也）木股神（御井神是也）參逢天此河乃魚乎漁天奉饗太神禰言鰭乃狹物止謂止毛可食物也止故号其河鮎喰川 于時大地主及木股神爾勅言久吾可住在處矣汝等宣奉導大地主答曰久是與利西乃方朝日乃直刺山夕日乃日照留氣延嶺阿利請其地爾可行幸止啓天奉引導 于時在神名於者伊魔離神止白天此野爾生採五百箇野薦八十玉籤雜々乃幣奉流

- （其採野薦地者謂五十串野其奉饗地者謂美阿閑野謂髮狹野止）是與利西乃方杉乃小山乃麓爾到利給者石門別神迎來天敬禮啓須 大神宣久汝等吾勅言乃如爾志氏天吾乎待志哉答曰久然前乃如神宣則此處御矢乎藏地也止仍天太神甚加褒辭賜而此地爾一宿經而（此故爾謂矢倉乃鄉止亦謂屋度利乃社止）猶山坂乎攀登天杉乃小山乎經天氣延乃山爾到利給布于時広浜乃神參相天時節乃御衣奉留其地乎謂御衣足止 直爾氣延乃嶺乃下津磐根爾宮柱廣敷立高天乃原爾峻峙搏風天天上乃如儀仁志氏天鎮座須（天石門押坐故天石門別云八倉鄉爾坐姫御神故二八倉比壳ト云）此夜八百萬乃神々集爾集天エラキ樂賜其神集志所者喜多志嶺止謂 其噓樂之手草及雜々乃物乎所藏者加久志乃谷止云 即大神詠曰 雲乃居留八倉乃鄉能喜延山 下津岩根爾宮井曾女都毛 此後大泉乃神爾勅志天天真名井乃水於波玉乃碗爾汲湛天写左志女朝夕乃御食炊水止須 亦小泉神田口乃御田乎奉利弓御饌乃御田止須氣延乃山亦乃名者神山大日?貴坐故爾尊而云神山止 而後經二千百五年而到小治田御宇元年癸八月太神毛原美曾持爾託曰久吾宮地遙爾高峻志此故爾神主祝部巫乃百乃蒼生爾到萬天參詣拜趨爾倦勞奈牟 杉乃小山者不高不低不遠不近直善地也彼嶺爾欲遷座止吾前爾從天持降流所乃瑞乃赤珠乃印璽於波杉乃小山乃嶺爾深久埋弓天乃赭乎以覆藏是其赭者諸邪鬼妖怪及諸病乎厭爾奇仁妙奈流驗止教喻賜只 赭印璽止号弓奉秘崇是也其印璽所埋之地乎謂印璽乃嶺（又謂御石之峯）于時神主祝等啓申久大神乃如託宣可奉遷坐雖然無効驗者諸人乃取信如何止其時大神宣久宣哉 此言吾御前乃谷乃水乎逆仁山乃頂爾漑流?御田作以造宮乃料食止勅一夜爾而谷水逆洄而山頭爾至田則成熟其穗八束爾莫々然而喜穀（其谷乎左迦志磨谷云 其田乎志留志田云） 神主祝及百蒼生其神宣炳チコナル乎恐美畏美則杉乃小山爾宮柱太知立高天原爾千木高知天乃御蔭日乃御蔭止永仁隱坐弓國家乃大基乎守護御坐云云迂坐乃月者長月日者中三日此故爾此日乎以御靈現乃日止奉啓矣 奉授神位

杉の小山の記

矢野神山八倉比売神社本紀解説書

天保二年（1831年）出雲宿禰俊信 本居宣長の高弟



- ・【天石門別八倉比賣大神御本記】

※ぐーたらさんのブログ参考

- ・古の天地の初めの時、高天原に現れた神の名を天之御中主神（アメノミナカヌシ）という。次に国が浮いた脂のように漂っているときに、葦の芽が生えるように生まれた神を國常立尊（クニトコタチ）という。その後 生まれた神に伊邪那岐神（イザナギ）次に妹の伊邪那美神（イザナミ）がおり、この二柱の神によって国土や海原、および山川や諸々の神が産み出された後、伊邪那岐神が左の目を洗った時に生まれた神の名を**日靈大神**（ひるめのおおかみ）といい、またの名を**八倉乃日靈大神**（やくらのひめのおおかみ）という。
- ・最初に高天原で戦に備えた後、天石門別の神に勅命を発して「今後、汝らは吾（われ）に代わって戦に備えよ。そして、汝らはこの『**羽々矢**（はばや）』と『**御弓**』を葦原中國（あしはらのなかつくに）に持って降り、良い場所に奉藏せよ」と申された。また、吾（八倉乃日靈大神）も天降り、「『**天羽々矢**（あめのはばや）』と『**天麻迦胡弓**（あめのまかこゆみ）』を納めるのに相応しい場所である」と申された。 よって、二柱の神が高天原より弓矢を持って降りた。
- ・その時、二柱の神は天の中ほどに立ち「**この矢の止まった所に奉藏**しよう」と言って矢を放った。その矢が落ちた場所を「矢達の丘」という（今は「矢陀羅尾」という）。そして二柱の神は、この地に矢が落ちた事を覚えておくために「**矢乃野**（やのの）」と名付けて、その矢を奉藏した倉を「矢乃御倉（やのみくら）」と呼んだ。また、その弓を奉藏した地を「弓乃御倉（ゆのみくら）」という。

- そして、二柱の神はその後も此処に留り、御矢倉と御弓を守り続けた。その後、比賣大神（八倉乃日靈大神）は天の八重雲を押し分け、伊津乃路（いつのち）を別けて天降った。最初は杉の小川の清き流れを見て「この川は深くて流れが早い」と申された。そのため、此処を「早渕の村」という。このとき、大地主神（土宮）と木股神（御井神）が参上し、この河の魚を漁って献上した。すると、太神（八倉乃日靈大神）は「鰯（はた）の狭物と言うべき食物である」と申されたので、その河を「鮎喰川」という。
- また、このとき（八倉乃日靈大神は）大地主（おおくにぬし）と木股神（きまたがみ）に「吾が住むのに相応しい場所に、汝らが案内せよ」と勅命を下すと、大地主神が答えて「ここより西方に朝日の真っ直ぐに刺し、夕日の日が照る気延の嶺があります。その地に先導しましょう」と申した。すると、伊魔離神（いまりのかみ）という神が現れて、昼間に野で採れた五百の野薦（敷物？）や八十玉簀（玉串）など様々なものを献上した。
- それから、西方の杉の小山の麓に辿り着くと、天石門別が出迎えをした。そこで、大神（八倉乃日靈大神）が「汝らは吾の言う通りにして待っていたのか？」と問うと、「はい、ここが神宣の通り御矢を納めた所でございます」と答えた。それを聞いた大神は褒辞を与えて、そこで一晚過ごした（このため「矢倉の郷」または「屋度利の社」という）。

なお、山坂を登って杉の小山を通過して**気延山に到る**と、広浜神（ひろはまのかみ）が現れて時節の御衣を献上した。そのため、此处を「御衣足（みぞたり）」という。ただちに気延の嶺の下津磐根（しもついわね）に宮柱と廣敷を立て、高天原を装って天上のように鎮座した（なお、「天石門（あまのいわと）」を押し開くため「**天石門別**（あまのいわとわけ）」という。**八倉の郷**に居る**姫御神**であるために「**八倉比売**（やくらひめ）」という）。この夜、八百萬（やおよろず）の神々は集って宴を行った。その神々の集った所を「喜多志嶺（きたしみね）」という。また、その宴（嘘楽）に使った色々な物を納めた所を「加久志の谷（かくしのたに）」という。

そこで大神は「雲の居る 八倉の郷の 喜延山 下津岩根に 宮井そめとも」と歌を詠んだ。その後、**大泉神**（おおいずみのかみ）が「天の真名井の水を玉の碗に汲み移させて、朝夕の食事を炊く水とする。また、小泉神田口の御田を献上して『御饌の御田（みけのみた）』とする。気延山は大日靈貴神の坐す所であるため『神山』とする」と勅命を発した。これより後、2105年を経た小治田御宇元年癸8月（推古元年秋8月）に、大神（八倉乃日靈大神）は毛原美曾持（けはらみそもち）に託して曰く「**吾（われ）の宮**のある場所は遥か**高く急峻**である。このため、神主や祝部、巫（みこ）などが参詣するのに疲れてしまうだろう。**杉の小山**（杉尾山）は高くもなく、低くもなく、遠くもなく、近くもない、**正に良い場所**である。そのため、この嶺に遷座することにしよう。

- 吾は以前、天より持ってきた**瑞の赤珠**（みずのあかたま）の印璽（しるし）を、**杉の小山の嶺**に**深く埋めて**、天の赭（あかつち）で覆い納めた。その赭（あかつち）は、諸々の邪鬼、妖怪および諸々の者に『これは病も厭う奇妙なる験（しるし）である』と教え諭してある。」と申された。赭の印璽と言って秘し崇め奉ったのはこれである。その**印璽**（みしるし）を埋めた所を「**印璽の嶺**（しるしのみね）」という（また「御石ノ峯」ともいう）。このとき、神主や祝部らは大神の託した通りに遷座して奉ったという。
- しかし、神主らが「諸々の人々は、これを信じないだろう」と言うと、大神も「そうであろう」と申された。そして大神（八倉乃日靈大神）は「吾が御前の谷の水を逆に山の頂きから漉いで御田を作ろう、それを以って宮の食糧とせよ」と勅命を下した。すると、一夜にして谷の水は逆流し、山の頭に至った。そして田の穂はすぐに成熟し、その穂は八束に実って良い稲であった（その谷を「左迦志磨谷（さかしまだに）」といい、その田を「志留志田」という）。そのため、神主や祝部、および多くの若者は、その神宣が事実であったことに畏怖・畏敬を念を抱いたという。遷座したのは9月13日である、よって、この日を以って御霊の現れし日として奉るのである。云々

栗国から阿波国

- 古代、現在の徳島県の北の地域は栗の生産地だったために栗国、南の地域は長国と呼ばれていた。
- 栗国は栗族が、長国は長族（即ち海人族）が住んでいた。
- 栗族の中心地は名西山分の神領、長族の中心地は名東郡 佐那河内地方であった。
- 名西郡 神山町の「府殿」という地名は、もともと部族統制の中央政府が置かれていた場所であり、佐那河内の「府能」も本来は「府野」で長族の政府の所在地であったと言われている。
- のち、律令制において長国は栗国と一緒に令制国としての栗国が成立した。
- 和銅6年（713年）、元明天皇による好字令で、地名を二字で表記するため「栗」は「阿波」に変更された。

八萬津と名方津

- 長国の「八萬津」は今の上八万の大木周辺に位置していた。
- 遙か昔は「大木」まで海水が掃入していたので船舶が往来していた。
- 海人族の総帥 安曇宿祢がこの「大木」に居住地を構え、祖先である安曇王の城を奉祀したので「王城（オオキ）」と呼び、のちに宛て字で「大木」と書かれるようになった。
- 周辺に「宅宮神社」がある、祭神は「意富門麻比賣（オホトマヒメ）」で「八萬津」を祀る神であり、「大きな港」を指している。
- 西光寺橋のあたりに港の遺跡があり、其処まで船が往来していたらしい。
- 「八萬津」は古くは海に繋がり、多くの舟の往来があったが、次第に上流からの土石や海から流れ込む砂礫に陸地が増していった。
- このように「高津」「中津浦」「下津浦」など、いずれも「八萬津」であったが現在では田畑や人家となってしまった。

名方津

- **名方津**は今の国府町や僧都の辺りで**僧都淵**（寒水の意）即ち、神山の川より流れる多量の水を受け、その傍らで**海水**を浸々と溜めていた場所であった。
- 近くの「**和田**」や「**海見**」は**狭湖**で山間の深く水を溜めいたところである名残であり、「大浦」もその名のごとく、昔は海辺であり、国府町「和田」には「海神 和多都美豊玉比売神社」を祀っており、石井町尼寺「**尼木**」は**海人城**（あまぎ）で海人族が繁栄した場所であった。
- **名方津**は**栗国**に、**八萬津**は**長国**に属していたが、二所の何れも良港で優劣がなかったと伝わり、大化元年、栗国、長国を合併し、「**栗ノ国**（阿波国）」とするにおよび、中央政府である**京都との連絡**には立地条件が良い大きな港の「**名方津**」を利用した。
- その流れから**名方津**の近辺が**国府**の建設地に選定され、現在の国府町に至る。

古墳時代の粟国と長国

- 粟国にあった矢野・気延山地区には、**古墳時代初期**に宮内古墳や奥谷古墳などの前方後円墳が多く造られたが、中期には造られなくなった。
- **古墳時代中期**には、長国に渋野丸山古墳等が多く造られる。
- 丸山古墳は、5世紀中頃に築造された県下最大の前方後円墳であり、県内有力豪族の活躍を知ることができる。
- そして**古墳時代後期**には、また気延山周辺や眉山周辺に古墳が作られるようになる。
- この事実は、大和朝廷とつながりの深い豪族が、その時期に大きく変化したことを表している。
- 古墳時代中期に粟国から海人族の長国へと勢力が移り、また古墳時代後期には粟国が優勢となり、長国は粟国に統合されていったと思われる。
- これはまた、その時期に異なった渡来人の流入を示すのかもしれない。

海部城(アマギ)と阿波君

- 尼木 府中村ニアマキト云所アリ昔十二代景行天皇之朝日本武之王子息長田別命(おきながたわけのみこと)ヲ阿波之君ニ置玉フテ夷之都ニ定賜フ国庁の跡也 尼木は海部城ノ訛也後ニ曾称に永くスミ玉フ棕部又ハ曾称海部ヲ姓トシ玉フ
- 阿波君は阿波の国造そして国司の祖とされる。
- 阿波君として阿波国に派遣された息長田別命は、海部城を拠点とし、南の山側の白鳥神社に父である日本武尊を祀るとともに、東の海側の雨降神社と王子和多津美神社、そして西の王子神社に豊玉比賣命を祀り、守護神とした。
- 息長田別命の子孫は、天平宝2年(758年)に豊野真人篠原(とよののしのはら)が都から阿波国司として派遣されるまで代々国司を務めたが、その後は、那賀郡の県主となり海部姓を名乗るようになった。

息長田別命

- **日本武尊**の父である第12代**景行天皇**には、55人の皇子と26人の皇女がいて、このうち、日本武尊ら5人の皇子と皇女1人は都に残り、あとの50人の皇子と25人の皇女は国県に封じたとある。
- また、次の第13代**成務天皇**の事績として、古事記に、国郡・県邑を定め、それぞれ**国造・県主**を置いたことが記されている。
- つまり、4世紀頃に成立したヤマト王権は、その支配地を拡大していく過程で、**皇子・皇女**を支配地域に派遣し、**婚姻**等により**在地豪族**との結びつきを深めることで、さらにその支配を確立していったと考えられる。
- **日本武尊の皇子**である**息長田別命**もヤマト王権の支配を確立するために阿波へ派遣されたのだろうか。

国造

- 国造は、大和政権が地方に置いた地方官で、1郡ほどの地域を統治していた。
- 国造はヤマト政権により任命されるのはその地方でも有力な豪族で、直（あたい）が与えられるのが普通であったが、臣（おみ）や君（きみ）などの高い姓を持つ国造もいた。
- 直姓はヤマト政権に隷属的傾向を示すのに対し、臣や君姓の国造は辺境の国造でヤマト政権に抵抗することも多かったと言われている。
- 国造には部民や屯倉（みやけ）の管理が委ねられ、地方の特産物や馬・武器などの貢献を命じられた。
- また国造が率いる国造軍は、大和国家の重要な武力を構成していた。

〔クニの展開と凡直国造〕

- 服属した**地方族長**を**国造**に任ずるとう大和王権の地方支配制度としての国造制は、遅くとも**六世紀中期**には広く**定着**していた。
- 阿波地域については、六世紀中期から七世紀後半の間に「**国造本紀**」に「**粟国造**」「**長国造**」が現れている。
- このうち**長国造**については勝浦川・那賀川・海部川流域で構成されるクニの首長が長直の姓（カバネ）を与えられてなった。
- 一方、**吉野川下流域**ののちの板野・名方・阿波三郡に勢力をもつ**粟凡直**（あわのおおしのあたい）**氏**は「地名（粟）＋大押（凡）＋直」を名乗っており、**六世紀末**になって大王権力に組織されたものとして姿を現している。

- 六世紀後半以前に第一次的な小国造に対応する複数の地方首長が存在していたが、地方支配強化を急ぐ大王権力の後援のもとに、それら首長を統括するものとして凡直国造の地位に栗凡直氏がついたと思われる。
- またのちの三好・美馬両郡を中心とした吉野川中流域については、讃岐と深く結び付いて発展していた地域であり、「国造本紀」には現れないが、佐伯直氏を首長とするクニを構成していたのだろう。
- この3つのクニは、いずれも第一次的な小国造として六世紀半ばには姿を現していた。
- 研究史のうえで阿波三国説が出されているが、これをこの時期の政治状況とみなすならば正しい把握であり、六世紀末の推古朝以降七世紀中期にかけては三つの「クニ」とそれを統括する国造が併存するという体制が存在した。

栗国國造と神山

- 応神天皇の御世(西暦5世紀)に栗国國造が任命された。
- 『神領村誌』によると、大栗神社の祭官は、栗国造の下分上山村にある國造本館によって世襲されてきた。
- 神領村には國造別館が存在し、阿波風土記に記されている国造館の跡地が今も下分上山村栗生野に残っている。
- 『神領村誌』によると、聖武天皇の命により729年に神宮寺が建立された。
- 桓武天皇の御信仰により、784年には神領村と名付けられた。
- この記録は、大栗山と大宣都比売の神話的な起源を示しており、地域の精神的な基盤となっている。
- 神山町は、古くは「大栗谷」と呼ばれ、開墾地を神領として耕作し、未開の山地一帯は「神山」と呼ばれていた。この郷土の古名にちなんで合併後、「神山町」と命名されたといわれている。

粟国造

- 粟国造（あわのくにのみやつこ）は、後の令制国の阿波国北部、現在の徳島県北部を支配した国造。
- 『先代旧事本紀』『国造本紀』によれば、応神天皇の御世に、高皇産靈尊の9世孫の千波足尼（ちはのすくね）を国造に定められたとされる。
- 「粟」の名は、アワを多く産したことに因むという。現在の徳島県は山地が多く、初期の農耕生産は、畑作に重点を置いたものであったためともされる。
- 徳島県名西郡石井町にある中王子神社には阿波国造墓碑があり、国造氏族は粟凡直氏（あわのおおしのあたい）とされる。
- 一般に凡直姓の国造は直姓の国造より広い地域を支配し、令制国に継承される規模を有していたとされ、律令制直前の粟国造の領域は令制国の「粟国（阿波国）」にそのまま継承されたとみられている。

阿波国造墓碑



徳島県指定有形文化財

阿波国造墓碑

平成二年十一月二十七日・県指定



墓碑の構造および形状

縦十九八センチ、横十七・四センチ
厚さ十〇・〇センチの瓦質の
磚造りで上下に（ほぞ）を作り
出し、上部に屋蓋、下部に台を
組合せる形態になっている。

正面に 三行 十九字（十八字説



もある）の銘文

「阿波国造

名方郡大領正七位下

栗凡直弟臣墓」

側面に二行一〇字の銘文

「養老七年歳次癸亥

年立」とへらで刻まれている。

碑文の説明

「名方郡」は奈良、平安期の郡名

（現在の名東名西郡）。

「大領」は当時の郡の長官。

「正七位下」の部分は不鮮明で、忌寸部と読む。

「栗凡直」は氏族の名で栗凡直氏は当時吉野川下

流で最も勢力のあった豪族である。

「弟臣」はその氏族の一人の名前。

「養老七年歳次癸亥」は西暦七二二年で奈良に

都が置かれ 古代国家の最も栄えた時期である。

磚造りの古代墓碑は他に類例がないが、墓に碑を立て、官位・姓名を記すことを規定した「喪葬令」にのっとった墓碑であり、字体・焼成の面からみても 奈良時代の制作にかかるもので、墓碑としては全国的にみても最古の部類に属する。

- 正面と側面には文字が刻まれており、それぞれ「阿波国造 名方郡大領正〇位下 栗凡直弟臣墓」「養老七年歳次癸亥 年立」の文字がある、これによって、この碑が栗国造で名方郡の郡司（大領）であった栗凡直臣（あわのおおしのおとおみ、直は姓）が養老7年（723年）またはその直前に没したために同年に造られた墓碑であることが判明した。
- 名東の地藏院にある穴不動古墳は、栗凡直氏一族の墓だとも言われている。
- 「阿波」の名称と表記
古代、現在の徳島県の北の地域は栗の生産地だったために「栗国（あわのくに）」、南の地域は「長国（ながのくに）」と呼ばれていたが、大化の改新の後に「栗国」に統一された。和銅6年（713年）、元明天皇の命により地名を二字で表記するため栗は「阿波」に変更された。

長国造

- **長国造の領域**は、那賀川流域を中心とする、現在の徳島市、小松島市、阿南市、勝浦郡、那賀郡、海部郡にわたる地域とされ、国造氏族は**長直氏**とされる。
- だが、一般に直姓の国造は凡直姓の国造より**支配地域は狭かった**とみられており、長直氏の姓が直であることから粟国造である粟凡直氏より下に置かれたともされる。このため、**律令制直前には粟国造の領域に併合**されていたとも考えられている。
- 氏神
- **御間都比古神社**（みまつひこじんじゃ）は、徳島県名方郡**佐那河内村**に鎮座する式内社。
- 長国造の**韓背足尼**（からせのすくね）が**稲の神**である**長国造の祖神**の御間都比古命（観松比古命）を祀った。

房総における国造



2-154 図 房総における国造の分布図

房総の阿波国

- 粟国が阿波国と呼ばれる律令前に、房総地区には、阿波国があった。
- 阿波国はのちの令制国の安房国の西部（安房郡と平群郡）をさし、現在の千葉県館山市と安房郡鋸南町および南房総市の一部に当たる。
- 後に阿波国の北部は平群郡、南部は阿波郡となった。
- のちの安房国東部（長狭郡と朝夷郡）、現在の千葉県鴨川市と南房総市の一部にあたる地域には長狭国造の支配する長狭国があった。
- 阿波の地名の由来は、『古語拾遺』によれば、神武天皇の橿原宮を造営した天富命が、より豊かな土地を求めて四国の阿波の忌部氏を従え黒潮にのってこの地に移り住み、阿波忌部の元居た場所の地名から阿波と名付けたという。（その頃は粟国だったはず?）

房総の阿波国造

- **阿波国造**（あわのくにのみやつこ）は、のちに安房国西部となる地域（阿波国）を支配した国造。『先代旧事本紀』『国造本紀』には**阿波国造**、『洞院家記』や『北山抄』には**安房国造**とも表記される。
- **律令制**においては「**阿波国**」の表記は南海道の**旧粟国**が使用したため、**阿波国造**が**支配**した東海道の阿波の地名は**安房**と表記されるようになった（安房国、安房郡など）。
- これに伴い、**阿波国造**も**安房国造**と表記するようになった。『日本文徳天皇実録』の嘉祥3年（850年）6月己酉（3日）条（神道・神社史料集成参照）によれば**伴直千福麻呂**という人物が「**安房国々造**」であったという。
- また『先代旧事本紀』の「国造本紀」の伊甚国造条によれば、**伊許保止命**という人物が「安房国造」の祖であるという。

歴代阿波国司

- **豊野篠原** 天平宝字元年(758年)
- **菅生王**：天平宝字7年（763年）
- **藤原真作**
- **藤原伊勢人**：延暦15年（796年）
- **藤原文山**：延暦17年（798年）
- **藤原真夏**：大同2年（807年）
- **田口息維**：大同3年（808年）
- **佐伯長継**：弘仁4年（813年）
- **菅原清公**：弘仁7年（816年）
- **小野峯守**：弘仁11年（820年）
- **藤原浜主**：天長4年（827年）
- **善道真貞**：天長8年（831年）
- **和家仲世**：承和5年（838年）
- **山名王**：承和6年（839年）
- **長岑高名**：承和9年（842年）
- **藤原良相**：承和10年（843年）
- **源多**：嘉祥3年（850年）
- **橘真直**：仁寿元年（851年）
- **源多**：仁寿2年（852年）
- **源勤**：斉衡元年（854年）
- **藤原輔嗣**：斉衡2年（855年）
- **茂世王**：貞観3年（861年）
- **藤原基経**：貞観7年（865年）
- **清原秋雄**：貞観8年（866年）
- **源興**：貞観11年（869年）
- **藤原安嶺**：仁和元年（885年）
- **藤原弘蔭**：仁和3年（887年）
- **高階成章**：長久5年（1044年）
- **藤原親政**
- **田口成良**：承安3年（1173年）
- **坊門忠清**：建久9年（1198年）
- **細川和氏**：後醍醐天皇による任命

国司は、701（大宝元）年に制定された「大宝律令」により、朝廷が地方諸国に置いた役人。
国司の任期は、令制では6年とされていたが、その後、特殊な地域を除いては4年と改められた。

阿波国司 田口氏

- 武内宿禰の末裔の阿波真人広純は斉明天皇の658年に阿波国司として着任。
- 斉明天皇7年（661年）に、阿波国司真人広純が、新羅征討に加わる。
- 真人の末裔の田口息継は808年5月に阿波国司に任ぜられている。
- 国司の任期は4年間であり、任期が終り都に帰った。
- しかし、都では藤原氏の全盛時代であり、田ノ口氏は紀系であるので、重任に就けず自分の先の任地である阿波国に帰り、石井町高川原大字桜間に館を築いて、この所を本処に吉野川下流と鮎喰川の三角州の土地をしだいに荘園化し私有地とし土着して阿波国の豪族となった。
- 田口氏は桜間に居て田口または桜間を名乗り、息継の何代か後の阿波介国風は桜間にいて、阿波国統治につとめ、その子文治直行は桜間の防備を整え、931～947年の頃、西海を乱した藤原純友が讃岐・阿波に侵入したのを迎え撃ったといわれる。

- その弟桜間ノ介良遠は勝浦本庄に城を築いて蟠居していたので、一族は当時の阿波における最大の勢力として知られていた。
- 成良は平清盛の信任も厚く、平氏に味方する四国第一の勢力として活躍していた。
- 直行は阿波を統治し、子孫も代々その職を継ぎ、桜間を名乗ったが、良連の跡を継いだ甥成良（しげよし）は田口を名乗り武威を誇った。
- 成良は安徳天皇の1182年正月阿波守となり、ついで阿波大輔と称し、吉野川下流の肥沃な沖積平野を占有した。
- この田ノ口氏が名西山分の大栗山にも勢力を伸し、平安時代より南北朝時代にかけて大宜都比売神社の宮司を兼ねていた。
- 田ノ口氏が神宮として奉仕したことから、この神社の御名を神宮の田ノ口氏の名を取って田口神社と称していた時期もあった。

平家没落と田口氏

- 田ノ口氏は平清盛に仕え平家水軍の総指揮者として忠誠を尽し、兵庫の経ヶ島を築いた。
- 平家没落にあたっては讃岐国八島に御在所を構築し御座船を仕立て、安徳天皇をお迎えした。
- 平家物語巻11先帝御入水の条にこの田口成良のことがくわしく書かれている。
- その中で「息子田内左衛門教能を生捕せられ今は叶わじと思ひけん」とあり、八島の合戦で一人息子の教能(のりよし)を義経の家来、伊勢三郎に捕えられた。
- そのため源氏に寝返ったと言われている。
- 平家最後地壇の浦で戦死した田ノ口氏の残党は、一族郎統を引きつれて伊予国川之江に上陸して、自分の領地桜間に帰り、やはり大栗神社の神職をつとめ、一宮氏を名乗ったと言われる。

義経と田口氏 屋島の戦い

- 元暦二年(1185) 義経軍は五隻の兵船と十五隻の輸送船で、勝浦荘の中の湊に着く。
- 旗山を越えて、近藤六親家の助勢を得て丈六の桜間にある田口氏の熊山城を攻める。
- 田口成良は伊予へ、弟の良遠は本拠地の桜間に居たため難なく落とされる。
- 勝占神社に武運を祈り、あずり越えから鳥坂を越えて石井の桜間城へ攻め入る。
- 桜間城は堅城であったが、主戦力は伊予の河野征伐に出かけていたため、桜間良遠以下討ち取られてしまう。
- 大坂越から引田へ出た義経軍は、勢いに任せて屋島の平家軍を急襲した。
- 古高松の火攻めに狼狽した平家軍は軍船に乗り沖へ避難してしまう。
- 平家の頼みは田口教能(のりよし)三千騎の屋島への帰陣であった。
- しかし、桜間良遠以下全員討ち取ったとの伊勢三郎の虚言により田口教能は義経軍に降ってしまう。この知らせを聞いて田口成良(しげよし)率いる田口軍は義経陣営に寝返ってしまう。
- これにより平家軍の敗戦は決定的になったと言われる。

桜間神社と田口成能の五輪塔



佐々木氏

- 平家を滅した源頼朝は、近江源氏である佐々木経高ささきつねたかを文治2年（1186）に阿波国，土佐国，淡路島の三ヶ国で守護職に任命した。
- この佐々木経高は、鎌倉殿の13人で、源平合戦開始の最初の矢を放ったことで知られる。
- 佐々木経高は、京都での重職があるため、阿波守護に任命された折りには、長男の佐々木高重が守護代として鳥坂城を築いて三国の守護に当った。
- 鳥坂城は、現在の名西郡石井町字鳥坂にあり、剣山山脈の東端にある山塊、海拔212mの気延山の山に延びる丘陵線の北の突端75.9mの山頂にある。
- ここからは阿波国府司庁が東1km足らずの所にあり、北方には前記の阿波の豪族桜間館がやはり1kmほどの位置にあり、海部城跡も眼の前にある。
- この地の旧支配者に対してにらみをきかすためにこの地を選んだのか？

佐々木氏から小笠原氏へ

- 佐々木 高重は、1221年に起こった承久の乱で阿波国内の兵六百人を率いて上京し、父経高とともに戦った。
- しかし、後鳥羽上皇は敗れ、佐々木父子は討死して果てた。
- 乱後、幕府は佐々木氏に代わり小笠原長清を守護職に任じた。長清は阿波へ入ると佐々木氏の居城であった鳥坂城を攻めた。
- ほとんど兵のいない鳥坂城は炎上し、城を守っていた経高の次男高兼は、一族と共に城を捨てて、名西郡の山中の鬼籠野村へ逃げた。
- そして、高兼は一族と家臣達が百姓となってこの地に住む事を条件に、自ら弓を折り腹を切って自害したという。
- 現在、神山町鬼籠野地区にある弓折の地名は、高兼が弓を折って自害した所で、同地区に多い苗字・佐々木はかつての阿波守護職、佐々木経高の後裔達である。

一宮神社と大日寺の玉垣



一宮神社と大日寺の玉垣には多くの佐々木氏の名前が見える。

高知縣阿波國名西郡神領村氏子惣代

願人

佐々木儀一

同

高橋岩太郎

同

太栗太郎兵衛

同

大埜健太郎

埜生女屋神社神名御改正奉願帳

明治十二年

小笠原氏と田ノ口氏

- 佐々木氏の阿波経営はわずか35年間で終り，かわって佐々木氏を滅した小笠原氏が阿波国の守護職となり，鎌倉時代，南北朝時代にかけて阿波国の実権を握っていた。
- こうした政変の移り変わりにも田ノ口氏はやはり大栗神社の神宮職を続け一宮氏を名乗っていた。
- 小笠原氏が阿波国を経営し池田町に大西城を築き，名東郡一宮には一宮城を築いて小笠原成宗を配した。
- 一宮城主になった成宗だが、一宮城の後方神山町神領に阿波国の名族田ノ口氏が大宜都比売神社の宮司であり，神領盆地の支配者であった。
- それ故に一宮氏は田ノ口氏を討ち，自ら大栗神社の神官となったとも言われている。

阿波小笠原氏

- 阿波小笠原氏の祖は小笠原長経の次男、**長房**である。承久3年（1221年）の承久の乱後、兄・長忠が阿波国守護に任ぜられるが、長忠が本国である信濃国への帰国を希望したために、代わって長房が守護となった。
- 文永4年（1267年）に幕府の命令を奉じて、三好郡郡領・**平盛隆**を討ち、褒賞として**美馬郡**と**三好郡**に26000町余りの所領が与えられ、**岩倉城**を拠点とした。
- 阿波の**小笠原氏**は南北朝時代には**南朝**に属したとされ、その子孫の多くは室町時代には国人化して阿波の守護を務めた**細川氏**に仕えたとされる。代表的な例としては**三好氏**、**安宅氏**、**一宮氏**（小笠原成助）、**大西氏**（大西覚養）、赤沢氏（赤沢宗伝）などが挙げられる）。
- その他の阿波小笠原氏の支流にも**七条氏**・**高志氏**などがある。

一宮氏

- 一宮氏は小笠原次郎長清嫡子太郎長経が阿州に封じられ、現在の三好郡池田町大西に居住したことから始まる。
- 一宮氏は、鎌倉時代の阿波国守護・小笠原長房の子・長久の四男である長宗が一宮大栗荘に居し、以西郡一宮に一宮城を築城。
- 長宗の子・成宗の代より一宮氏を名乗ったとされ、一宮成祐はその子孫となる。
- また、長宗・成宗・義雄・成行と続く4代は一宮城主と上一宮大栗神社の大宮司を兼任した。
- その後一宮成行の子の宮内少輔成良が下一宮を城主分として取り、その弟の成直が上一宮を神領分として取った。
- 両者は分離するも、成相の時には城主と大宮司を兼ねていたといわれる。

一宮大明神(一宮神社)



一宮神社本殿（重要文化財）

徳島県下で二番目に古い本殿。附棟札九枚- 寛永7年（1630年）建立。
三間社流造、正面千鳥破風付、銅板葺。
向拝は一間、唐破風造で要所の彫刻に極彩色をほどこしている。

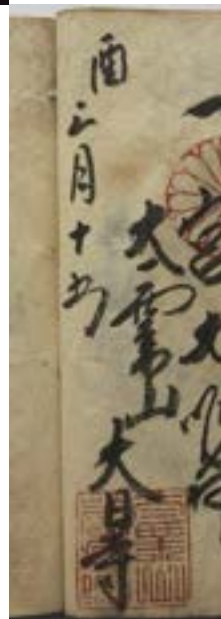
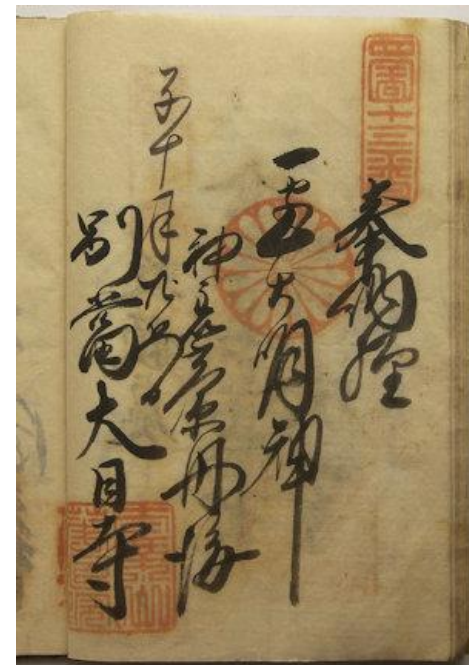


一宮神社

- 神山町 神領に鎮座する上一宮大栗神社から**南北朝時代**の戦乱期に当時の神官であった**田口氏**により一宮村の**明神峯**に分霊を移されたのが一宮神社のはじまりである。
- 大宜都比売命を祀る祠があった**明神峯**とは現在の一宮城跡の**明神丸跡地**で「明神丸 堅十八間横九間一宮明神社地跡」と記録も残っている。
- また、**社伝**には別の記載もある。
- 当社は大宜都比売命を奉祭社に而御座候。
- 此神粟を作り初め給う故、大栗姫命と申奉る。御神系は伊奘諾尊、伊将冊尊二柱の御神の御子にて、伊予国大三島に御鎮座始めは**伊予国丹生之内**より、神領村に御鎮座あり、其後**鬼籠野村**に御鎮座ありといへども其後人皇十三代成務天皇御宇日本武尊の**御子息長田別皇子**阿波国造となり給ひ**府中村**に在し給ひし時、大宜都姫神を崇敬し給ひ**一宮村**に鎮座なさしめ給ふよしに候。

阿波国一宮

- **一宮神社**は徳島市の西部「一宮町」にある。
- 元々は**上一宮大栗神社**が阿波国一宮であったが、参拝に**不便**であるため国府の近くの**明神丸**の山上に分祠が作られ、こちらが一宮となった。
- その後、一宮城が隣にあったため、戦国時代の**天正の陣**で主戦場となり、当社を含め辺り一帯**焼け野原**になったが、江戸時代初期に阿波二代目藩主蜂須賀忠英によりいち早く**復興**した。
- 神社の前には道路を挟んで四国八十八箇所十三番札所の**大日寺**があり、明治初年の神仏分離以前は当社が**札所**で、大日寺が**別当寺**であり、納経所として機能していた。
- なお、当社においても「**一宮大明神 本地佛十一面観音 大宮司**」と納経していた形跡もある。そして、明治初期の神仏分離以降は、当社の**十一面観音像**は**大日寺の本堂**へ本尊として遷座し、**札所**も移され、別当関係は解消した。



第13番札所 大栗山 花蔵院 大日寺

- 開基は弘法大師とされる。
- 大師は、大日如来像を彫造して本尊とし、堂宇を建立し安置した。
- 寺名の由来もこの縁起による。
- 戦国時代には「天正の兵火」により堂塔はすべてが罹災している。
- その後、江戸時代の前期に阿波2代目藩主、蜂須賀忠英公により本堂が再建された。
- 一の宮の本地仏は行基菩薩作の十一面観音像とされており、同じ境内であったため、江戸時代には一の宮神社が札所であり、当寺は一宮寺と呼ばれ納経所として参拝されていた。
- その後、明治の神仏分離令により神社は独立し、一宮寺は大日寺ともの寺名に変えたが、もとの大日如来像は脇仏となり、十一面観音像が本尊として祀られている。

一宮氏と三好氏

- 一宮(小笠原)氏は南朝に属したため、北朝の阿波守護細川氏にしばしば攻撃された。一宮城も何度か戦場となり、観応元年(1350)に、ついに細川氏に降った。
- 戦国時代に入り、細川氏に代わって三好氏が台頭すると、同じ小笠原流の一宮氏の存在感は大いに高まった。
- しかし、三好長治は元亀三年(1572)に後見役の篠原長房を上桜城に討って家臣の信望を失った。
- 12代一宮成助(小笠原成相)は細川真之と結び、天正五年に長治を自害させた。
- 成助は土佐の長宗我部元親と通じたが、三好一族の篠原自遁に一宮城を攻められ、一時は焼山寺に退いた。
- 天正七年の脇城外の戦いの後、一宮城に復帰したとされる。

中富川の戦いとその後

- 天正 10 年長宗我部元親は十河存保以下の三好勢との決戦を実行に移す。
- 長宗我部勢は、中富川をはさんで三好勢と対峙する。
- 約2万人の大軍を擁する長宗我部軍は、新開実綱や一宮成助らを先鋒とし、三好軍を討ち破る。
- 勝利した元親は、味方となっていた旧三好勢が謀反を起すの恐れ、騙し討にする。
- まずは富岡の新開遠江入道道善がターゲットに。
- 天正十年九月十二日、久松彦四郎親秋を名代として丈六寺に遣わし、道善を呼び寄せて合戦の勝利の祝い後に謀殺した。
- 天正十一年一月十七日に元親は一宮城主 長門守成祐を夷山に呼び寄せ、同行した弟、主計頭と家来の星合六之進と共に謀殺する。

一宮氏の滅亡

一宮成祐の死によって一宮氏は十二代で滅んでしまった。
儂くも謀殺された成祐は現地 夷山城の傍らに葬られ、現在もその墓は確認することができる。



- 神領にあった上一宮大栗神社の祭官一宮氏が滅亡して後は、別当たる大栗山 神宮寺に於いて安倍氏が祭祀を行った。
- この後、羽柴秀吉の四国遠征で長曾我部元親は大敗し、ついには降伏して土佐一国の一大名とされ、伊予・讃岐・阿波はすべて没収される。
- そして天正13年、蜂須賀家政が阿波一国を与えられ、阿波国主として入部すると、家政は土豪層の所領をすべて没収し、改めて与えるという形をとった。
- この措置に強い反発をもった湯浅十郎左衛門尉（仁宇山城主）・由岐備中守（山口城主）は一度は家政に従ったものの、ふたたび挙兵。
- これに家政は、重臣・山田織部佐宗重に命じて仁宇山城を攻め落とした。
- さらに同じころ名西郡大栗山の森藤上野介知保も謀反を起こしており、こちらには樋口内蔵助正長が派遣されて平定された。

- 一宮大宮司職については、蜂須賀家政が阿波に入った後の天正十四年（1586）に、讃岐国水主に居た長門守成助の甥の水主光信が召し出されて大宮司となり、小笠原信濃守と名乗って大宮司職を子孫に伝えたと言われる。
- 子孫の勝定するとき、蜂須賀氏の縁戚である小倉小笠原氏と同姓であることを憚って、笠原に改姓したと伝えられており、その後が笠原集光家となる。
- 長宗我部に滅ぼされた立江城主・小笠原兼幸の子孫も笠原性を名乗って今に続いている。



立江城址
小笠原氏の五輪塔と笠原家の墓群

富田大麻比古神社(弥吉明神)の祭神 猿田彦



明神町 大麻比古神社（おおまひこじんじゃ）は、伊予国河野庄より阿波国に来住し蜂須賀氏に仕えた河野弥吉郎が承応2年（1653年）に一宮神社から神体を迎えて河野家の鎮守としたと伝えられる。

御神像の御姿は鳥天狗を型取り赤銅によって造っていると伝えられている。顔は鳥天狗で身体は座して合掌しており、身の丈は一寸内外。